



彩の国
埼玉県

改訂版

中山道最大の宿『本庄宿』の再発見

本庄市滝岡橋～上里町神流川橋



溪斎英泉の浮世絵「本庄宿 神流川渡場」

埼玉県北部地域振興センター本庄事務所

発行に当たって

中山道は、今から 400 年ほど前に徳川幕府により整備された江戸と京を結ぶ街道です。道筋には 69 の宿場が設けられましたが、本庄宿は最大規模の宿場として大いに賑わいました。

今でも、中山道を歩くと、往時の面影を残す風景や思わぬ発見に出会えます。

本書では、中山道の歴史、見どころ、グルメスポットのほか、隠れたエピソードや住んでいる人の生の声も掲載しています。

冊子を片手に、中山道の小さな発見をお楽しみください。

埼玉県北部地域振興センター本庄事務所長 石川 勉



【江戸時代 中山道ベスト5】 天保 14 年(1843 年)中山道宿村大概帳

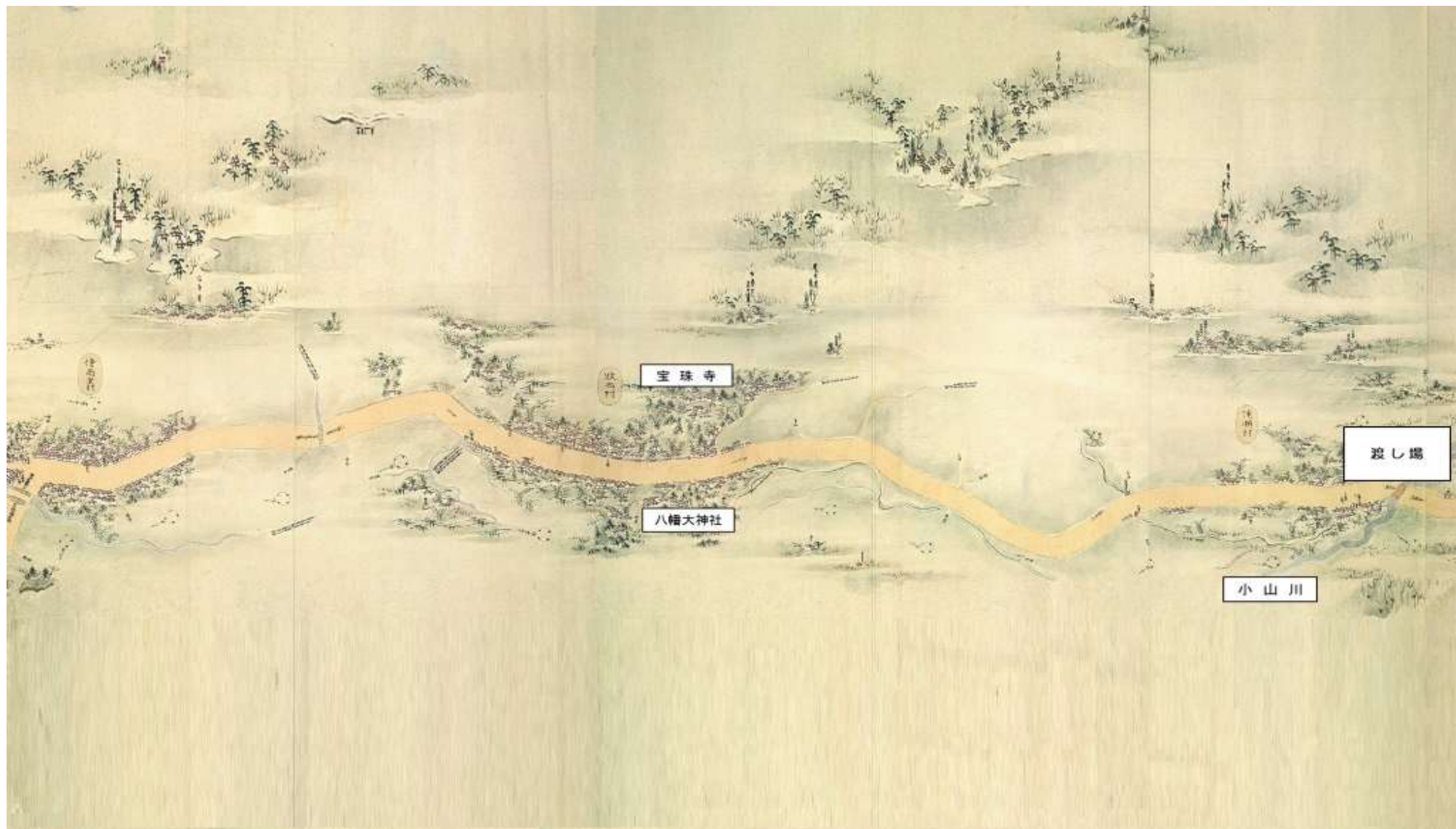
人 口		家 数		旅籠屋数	
本庄	4,554	本庄	1,212	深谷	80
高宮(彦根)	3,560	熊谷	1,075	塩尻	75
熊谷	3,263	高崎	837	本庄	70
高崎	3,235	高宮	835	鴻巣	58
加納(岐阜)	2,728	加納	805	板橋・板鼻(安中)	54

目次

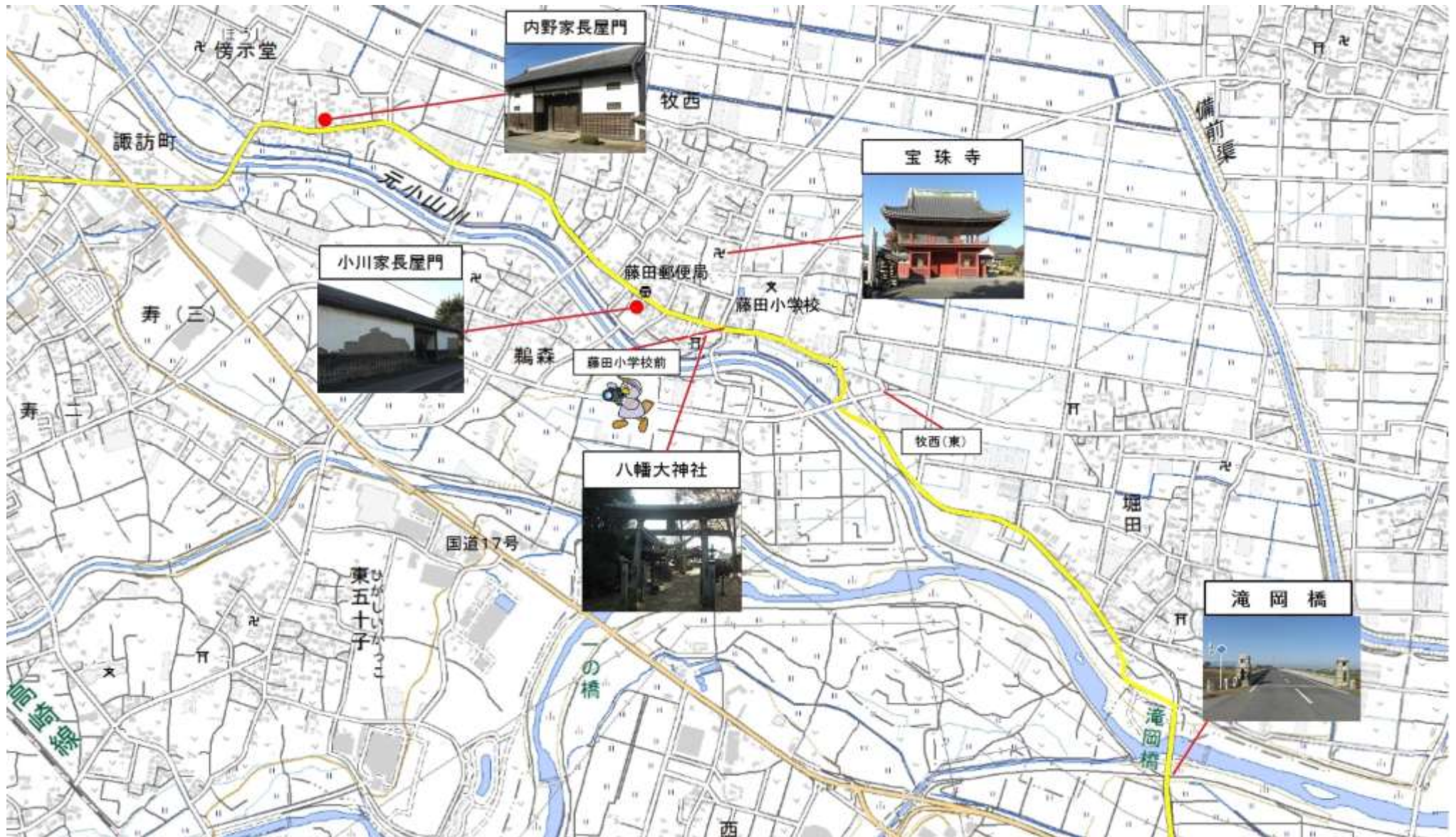
第1章	滝岡橋 ～ 内野家長屋門……………	2
	滝岡橋／八幡大神社／宝珠寺／牧西村／小川家長屋門／内野家長屋門	
第2章	傍示堂集落センター ～ 大正院……………	10
	傍爾堂村／馬喰橋／無宿人勇吉の目籠破り／裸薬師／そもそも本庄宿って／大正院	
第3章	久城堀 ～ 岸屋……………	18
	不動坂と久城堀／円心寺／本庄城／城山稻荷神社／ハナファームキッチン／旧大政商店／田村本陣／戸谷八商店／岸屋	
第4章	旧飯塚医院 ～ 山口呉服店……………	30
	旧飯塚医院／愛宕神社／開善寺／本庄仲町郵便局／諸井家住宅／新喜庵／電気館カレー／まちあい館／うなぎの寝床／松本時計店／すや薬局／本庄市立歴史民俗資料館／寺坂橋／山口呉服店	
第5章	賀美橋 ～本庄市立図書館入口（市神）……………	46
	賀美橋／若泉公園／阿夫利天神社／普寛霊場／安養院／蔵髪／旧本庄商業銀行煉瓦倉庫／金正／旧中澤医院／ふくしま製菓舗／野口製麺工場／関東有数の豪商 戸谷半兵衛／市神／本庄の事件簿「新選組大篝火事件」	
第6章	本庄宮本・蔵の街 ～ 唐鈴神社……………	62
	本庄宮本・蔵の街／cafe NINOKURA／金鑽神社／佛母寺／銭洗弁財天(本庄三弁天)〈本庄七福神めぐりマップ〉／長松寺／唐鈴神社	
第7章	浅間山古墳～ キムラヤ乳業……………	72
	浅間山古墳／中仙道の標柱／泪橋跡／安盛寺／神保原駅／キムラヤ乳業	
第8章	金窪神社 ～ 神流川古戦場跡……………	80
	金窪神社／陽雲寺／須賀家／高窓の家と勝場庚申塔群／一里塚碑と天王社／大光寺／勝場百庚申塚／神流川の渡し場跡／神流川古戦場跡	

第1章 滝岡橋 ～ 内野家長屋門

江戸時代はこんな感じ



これが現在



深谷から国道 17 号バイパスを本庄方面に向かい、「道の駅おかべ」を過ぎて少し行くと岡（西）交差点。この交差点を横断するのが中山道である。ここを右折して 300m ほど進むと小山川に差しかかる。滝岡橋だ。

滝岡橋



中山道の旧藤田村滝瀬と旧岡部村岡との境界を流れる小山川に架かる橋。それぞれの地名の一文字を当てて「滝岡橋」と命名されている。

大正8年より小山川の改修と併せて施工され、昭和3年に完成している。

鋼桁橋として古い形態を留めており、親柱や欄干に花崗岩を用い、橋台の表面には深谷にあった日本煉瓦製造の赤レンガを用いている。

旧中山道に架かる近代的な橋として竣工時の様相をよく残しており、国登録有形文化財となっている。



滝岡橋を過ぎてすぐ左折、堤防上の道が中山道だ。

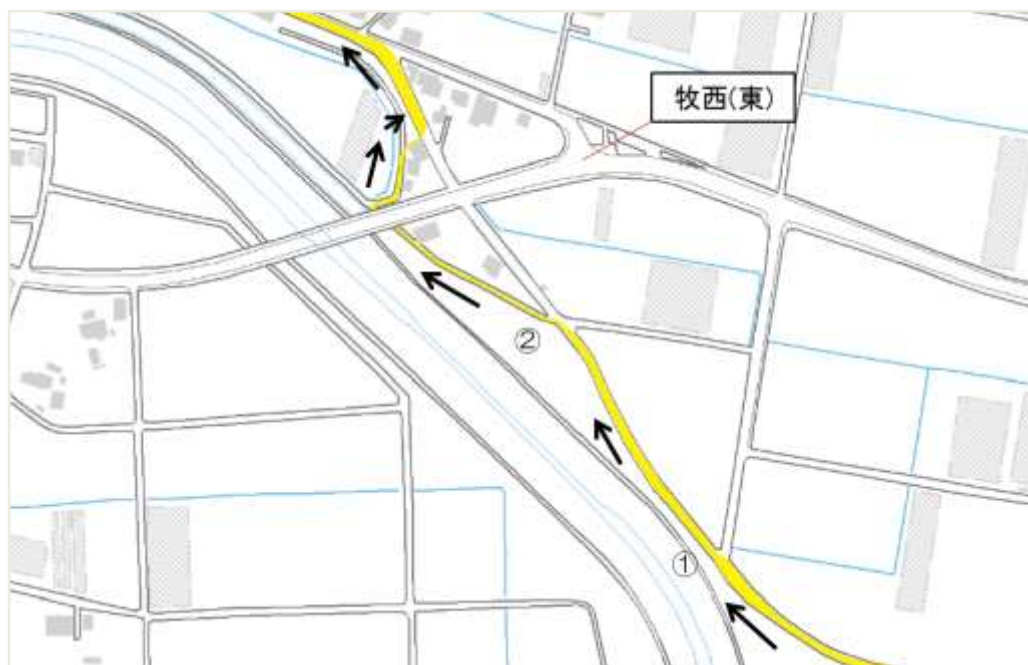
130メートルほど進むと、右に下る狭い道となり、この道を辿ると元の道に合流する。

ちなみに、江戸時代は滝岡橋よりも上流の、この坂道の辺りが小山川の渡し場だった。

しばらく進むと標識が見える。
道なりに行くと「妻沼・本庄市街」、
左に入る細い道は「歩道」との表示。



この左に行く細い道が中山道だ。（地図中①）



この道を進むとまた分岐が。（地図中②）

左に行く道が中山道であり、
「旧道」という表示。

この細い道を進み、県道の下をくぐって右に曲がると広い道に合流する。

ここから少し歩くと「藤田小学校前」交差点に差しかかる。

交差点を過ぎると左側にあるのが八幡大神社だ。



八幡大神社



建久年間（1195年）に児玉党の一族牧西四郎広末が武運長久を願い、鎌倉鶴岡八幡宮を奉還して祭ったもの。

神社奉納の金鑽神楽（かなさなかぐら）宮崎組は市の指定無形文化財となっている。

神楽は天照大神の岩屋のかくれ神話その起こりとされ、神を喜ばせる舞楽として各地にそれぞれのいわれを持って伝えられてきた。

鳥居をくぐると右側に塚が。塚には「御嶽山」「三笠山」「武尊山」と記した石碑が立っている。

実際に御嶽山や三笠山に参拝したのと同じ御利益が得られるとの信仰であろう。



宝珠寺

八幡大神社の向かいには美しい参道があり、その奥に宝珠寺がある。



70メートルほどの参道があり、境内には釈迦堂、稲荷社がある。

説明板によると「開基開山年代は不詳。慶安 2 年（1649 年）には徳川三代将軍家光より朱印石高 10 石を賜う。

寛政 2 年（1790 年）に村内より失火し本村 50 戸余りを類焼。その際、宝珠寺建物を焼失。

現在の本堂は文政 2 年（1819 年）建立」とある。

また、「元和 3 年、時の二代将軍徳川秀忠公時代に家康公の御遺体を久能山より日光に改葬する道中、この宝珠寺の山門に休息され、その縁として 10 石を賜りし」との言い伝えが残っている。



牧西村



この辺りは江戸時代の牧西村である。

牧西村は小前田から針ヶ谷を經由して本庄に向かう鎌倉街道本庄道との合流点であり、中瀬河岸（深谷市中瀬）や一本木河岸（本庄市小和瀬）への分岐点でもあったため、立場があり賑わっていた。



宝珠寺前から北西方向を望む

立場とは、宿場間に位置し、茶屋などがあった休憩場所である。寛政 12 年（1800 年）の資料では、街道沿いに商売を営む家が 14 軒ほどあった。内訳は、茶屋が 5 軒、小間物・荒物の店が 3 軒、刻みたばこ屋 4 軒、湯屋渡世と髪結が各 1 軒である。

十返舎一九の「諸国道中金の草鞋」では「ほんぜうを打すぎて、もくさいといふたてば、きれいなるちゃやあり、したくするによし」とこの立場をほめている。

小川家長屋門

宝珠寺から少し進むと、藤田郵便局の向かいに立派な長屋門がある。小川家の長屋門だ。



小川家は牧西村の名主を勤めるとともに、本庄宿全助郷村を総括・代表する立場の「助郷用元」も世襲していた。

そのため、本庄宿の助郷（宿場に常備する人馬の不足を補うため、宿場の近くの村から人馬を徴発する制度）運営には大きな力を持っていた。

また、一陽軒と称して、家伝薬「牛黄抱竜丸」の製造販売も行ってた。

ちょっと一息



当主の小川忠さんによると、「江戸時代には、御殿と呼ばれる建物があって、加賀百万石前田家の奥方が中山道を通った際に休憩所として利用された」そうだ。

その際の前田家とのやり取りを記した古文書があり、そこには『牧西村御本陣 小川弥市右衛門』と記されている。

御殿はもう取り壊してしまったが、欄間は移築され、現在も母屋の仏間に残っている。

小川家は明治時代に至っても、地域において重要な役割を果たしていたようで、郡役所的なものが置かれていたらしい。

内野家長屋門

小川家から800メートルほど行くと、右側に長屋門が見えてくる。比較的新しい門だ。門の西隣には「内野歯科医院」の看板がある。



ちょっと一息



内野家の先祖は傍示堂村の名主で、塙保己一を旗本永嶋家に紹介し、江戸に出るきっかけづくりをした人として知られている。

当主の内野昭八郎さんによると、「長屋門がいつ頃造られたか確かなことはわからないが、明治時代に一度焼けており、今残っているのはその後修理したもの。火災にあった時、まわりの部分は焼けてしまったが、扉を含む門の中心部は幸い被害にあわなかった。」という。

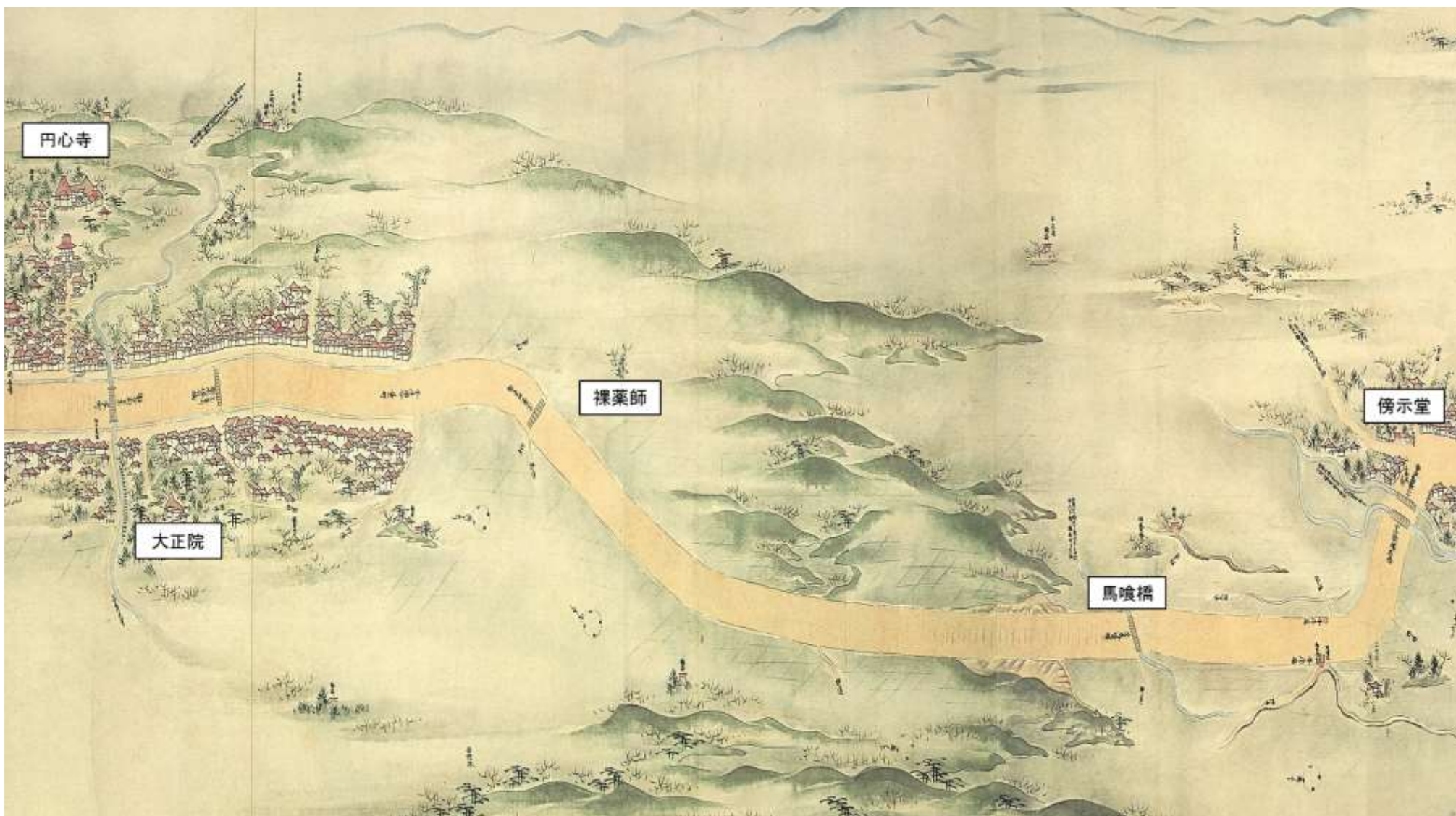
しっかりとした造りで、今でも、扉を閉めても全くずれがない。

もともとはもっと長い門だったが、歯科医院の駐車場を拡張する際に門の一部（10メートルくらい）を切ったということである。

敷地内には蔵も残っており、内野さんによると「何度か蔵破りがあり、刀剣類が被害にあったが、盗品の出所がわかるのを恐れてか、それらは滝岡橋のたもとに捨てられていた。」という。

第2章 傍示堂集落センター ～ 大正院

江戸時代はこんな感じ



これが現在



傍爾堂村

ちょっと変わった地名である。

傍爾堂村から中山道はほぼ直角に左に折れ、南に道をとるが、江戸時代、ここから北西に分岐する街道（五料道）は、上野国の前橋・沼田を通過して越後方面へと達していた。

傍示とは境界を示すことを意味し、地名の由来は、二つの街道の分岐点に仏堂を建立し、街道の傍示としたことに由来する。

前橋方面への分岐点であることから、「傍示堂中山道沿線地図」によるとこの辺りには茶屋が4軒ほどあり、飯・酒・菓子などを商っていた。

現在の傍示堂集落センターにある小さな御堂が傍示堂で、隣には天王祠が祭られている。



寛永10年（1633年）本庄宿に本陣が置かれるまでは、深谷方面から来た大名などは、傍爾堂村から五料道を進んだらしい。

「徳川時代之武蔵本庄」によると、「本庄には旅館の設備がなかったため、江戸参勤の大小名は傍爾堂より五料村（現在の玉村町五料）に転じ、加賀藩前田家は上州川合（現在の玉村町川合）河岸に本陣（旅館）を設けていた云々」とある。

急カーブを左に曲がり、元小山川の石橋を渡って右カーブを進むと国道17号に出る。中山道分間延絵図によると、当時はこの辺に「御料傍示杭」があり、ここから「本庄宿」に入る。

馬喰橋

国道 17 号を渡り、本庄宿に入って最初に渡るのが馬喰橋だ。

現在橋はなく、水路も細い道路に変わっているが、中山道分間延絵図によるとここに水路があり、豪商戸谷半兵衛が私費で架けた石橋があった。

ところで、この馬喰橋という名前の由来だが……。

ある馬方が馬の荷稼ぎで得た金で自分だけ飲み食いし、馬には何も食べさせなかった。そこで腹を立てた馬が、この橋で馬方に食いついたという説がある。馬の気持ちもよくわかる。



この先に見える長い坂が御堂坂だ。



御堂坂から本庄市街を望む



少し進むと左側にひっそりと庚申塔がある。

気を付けていないと見過ごしてしまいそうだが、江戸時代ここで目籠破りがあった。



無宿人勇吉の目籠破り

文政 11 年（1828 年）に御堂坂で事件は起きた。

武州中瀬（現深谷市）の無宿松五郎は賭博で捕えられ、水潜人足として佐渡送りが決まった。佐渡へ護送される途中、目籠一行が御堂坂に差しかかった時、庚申塚に待ち構えていた松五郎の仲間の牧西村勇吉や松五郎の弟である竹五郎ら数人が目籠を襲撃したのだ。

襲撃者たちは目籠を破って松五郎を救い出し、それぞれ越後方面、伊勢方面などに別れて逃亡した。

しかし、人相書が各地に手配されたことにより、1 か月後、勇吉や松五郎は次々と捕縛され、それぞれ刑に処せられた。

勇吉は「本庄宿にて磔」となり、刑は文政 13 年（1830 年）1 月 25 日に御堂坂北側において執行された。

なお、嘉永 3 年（1850 年）に侠客国定忠治が上州大戸で磔となったが、忠治が大戸に送られる際、忠治の子分が御堂坂で囚人籠を破って親分を助けたとの言い伝えが本庄に残っている。しかし、そのような史実はなく、無宿人牧西村勇吉による御堂坂目籠破り事件が誤って伝えられたものと言われている。

裸薬師

御堂坂を進み、東台 4 丁目の信号を右折して 140m ほど進むと左側に小公園がある。江戸時代は、ここに薬師堂があったらしい。

中山道分間延絵図では、「裸薬師祀」と記されている。

薬師如来を安置する御堂が、建てるたびに焼失してしまうことからこの名が付いたという。

現在御堂はなく、公園入口の道祖神と公園内に露座の薬師如来（台町薬師如来）がある。



現在の石仏は、前にあった薬師如来像の損傷が激しかったため、昭和62年に建立したもの。眼病に霊験あらたかとされている。

ちなみに、この公園は大正院が管理しており、毎年5月に薬師様の供養祭が行われている。



なお、この小公園前の道は、中山道が御堂坂に開通する以前の傍爾堂村に至る古道だったとされている。

中山道に戻ってさらに進み、十間通り線（本庄寄居線）の「中山道交差点」を渡る。中山道分間延絵図を見ると人家が増えており、この辺りからが実質的な本庄宿だったのであろう。

そもそも本庄宿って

天保14年（1843年）の「中山道宿村大概帳」によると、本陣2軒、脇本陣3軒、旅籠屋70軒となっている。

本陣とは、大名や公家、幕府高官など身分の高い人々が宿泊する公認の宿舎であり、供人が多人数の場合に補助宿舎として利用された施設が脇本陣である。

本庄宿には、中山道を挟んで北側に田村本陣、南側に内田本陣があった。

参勤交代に中山道通行を指定された大名は、上野、信濃、越中、越後、加賀、美濃等であったが、これ以外にも幕府の許可を得て通行する大名もあり、本陣の設置は、往還の整備や旅行者の増大、旅籠屋の増加など宿場の繁栄に大きく貢献した。

また、宿場利用者のために人馬を用意したり、書状や品物を次の宿場まで届ける飛脚業務を行う問屋場は本町、新田町、中町に合計6か所設けられていた。

大正院

「中山道交差点」からの道は下り坂である。
ゆるいカーブを進むと左側に石材店があり、そのすぐ西側に大正院がある。



大正院は、真言宗智山派に属し、天正 11 年（1583 年）の開山である。
現在の本堂は昭和 40 年に新築したもので本堂と相對して不動堂と薬師堂がある。薬師堂は旧本堂である。

また、不動堂には寺宝である不動剣が納められている。

この不動剣は、不動堂が建立されたときに奉納されたと伝えられている。剣の形象をとり、束は三鈷杵様に造られている。慶応 3 年（1867 年）の銘があり、長谷部国治の作である。昭和 54 年に本庄市指定文化財となっている。

また、本庄市は養蚕で栄えたことから、大正院には大正 12 年に蚕蛹供養塔が建てられ、毎年、蚕蛹供養祭が開催されている。





吉田信解副住職によると、大正院は、戦国時代末期に本庄氏が本庄城を築いたときに、裏鬼門として建てられたのがはじまりで、もともとは瑠璃光坊と称していた。

本庄宿の大火で堂宇を焼失し、しばらくは薬師堂しかなかったが、その後、不動堂、鐘撞堂ができて、昭和40年になって本堂が再建されたそうだ。

不動堂は江戸時代の後期にできたが、当時は成田詣でが盛んで、「本庄で成田詣でができないか」との願いがあったことから、成田山新勝寺の本尊の分霊を安置したものだという。

なお、本堂は寺院としての現代建築の先駆けであり、熊谷市の報恩寺とともに、雑誌『現代建築』に取り上げられたそうだ。

大正院には幕末の本庄宿を語るこんなエピソードも残されている。

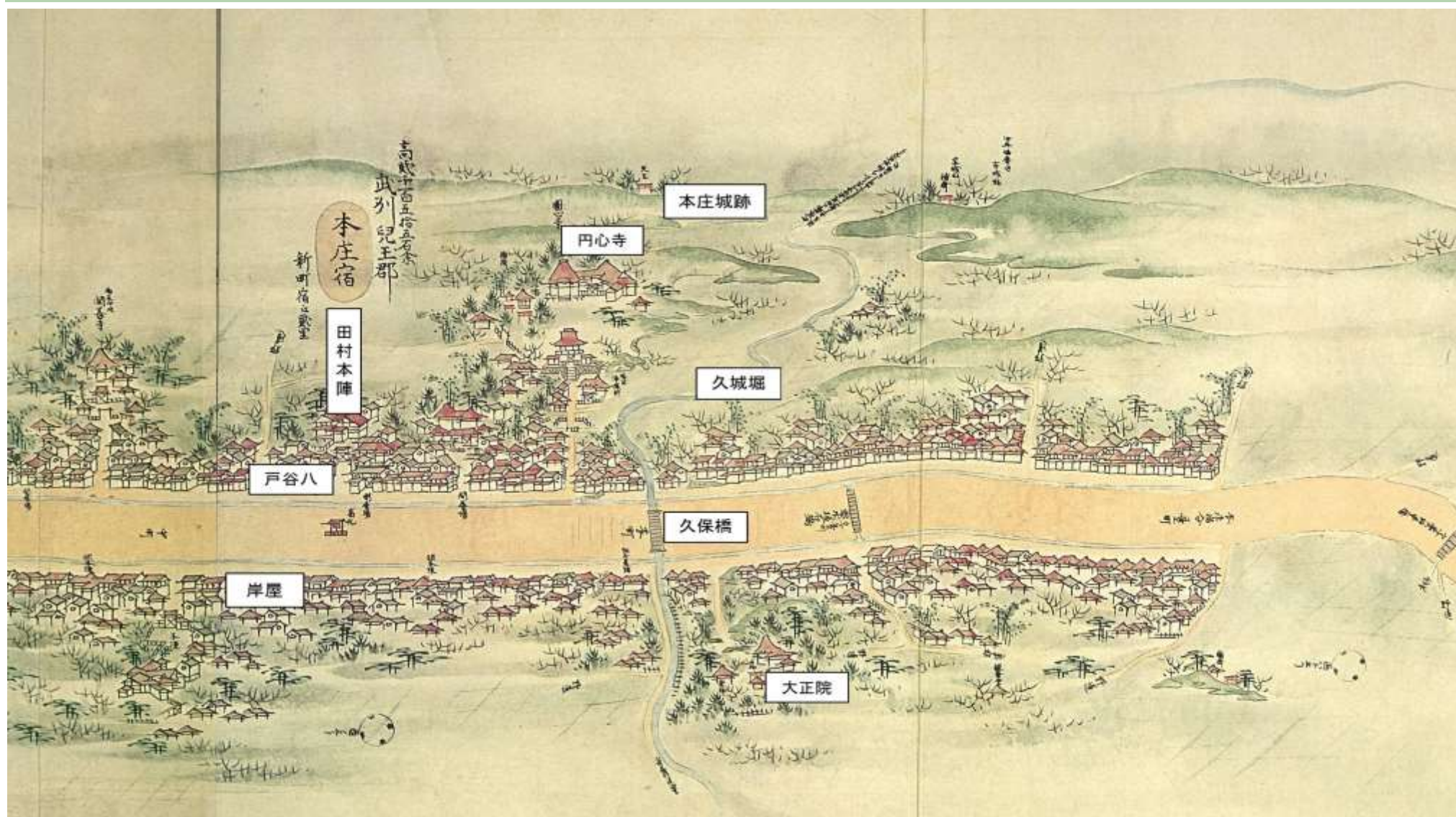
「会津藩の脱藩浪士甘利源治は、尊王攘夷を説いて多額の資金を集め、江戸に入ろうとしていた。本庄宿に宿泊し、出発しようとしたときに幕吏の探索の手が伸び、槍で太股を突かれて深手を負った。甘利は身を軽くするために懐中の金を撒き散らしながら逃げたと言われている。」

結局は捕縛されてしまったが、志半ばで破れたその甘利源治の墓が大正院に残されている。

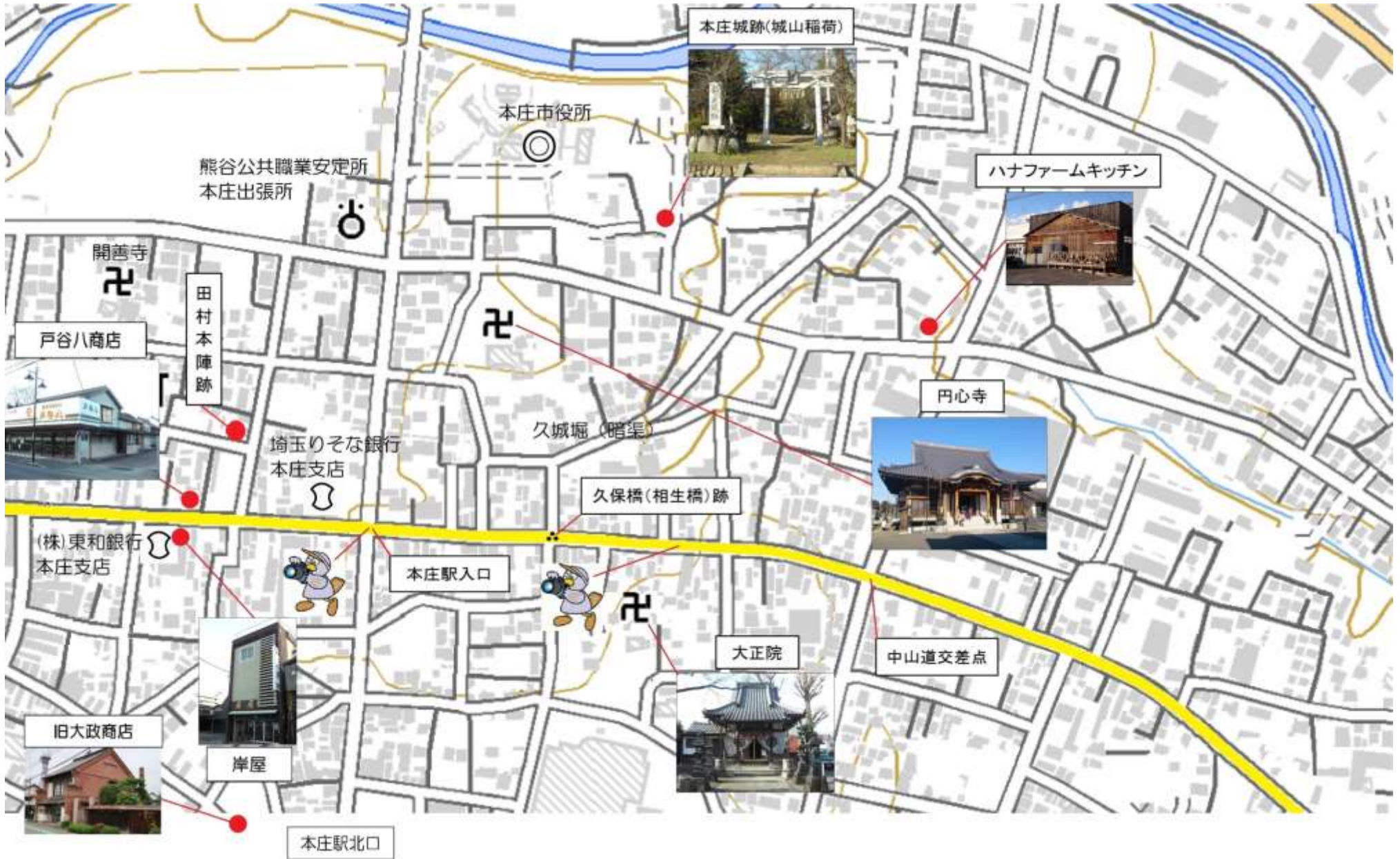


第3章 久城堀 ～ 岸屋

江戸時代はこんな感じ



これが現在



大正院入口の山田石材店の店先に「中山道本庄宿」の石柱がある。
歴史好きの店主が個人で設置したもので、息子の英希さんによると、以前は十返舎一九が中山道について記した石碑を置いていたそうだ。
その石碑には、大正院前を西に下る坂の名を不動坂と記してある。


不動坂と久城堀

大正院から不動坂を50メートルほど下ると押しボタン式信号の交差点に差しかかる。

この交差点で中山道を南北に横断する道路は、昭和40年頃までは久城堀と呼ばれる水路であった。

今は暗渠（道路の下に管を埋設）となり、往時の面影はないが、久城堀の名が示すように本庄城はこの水路を天然の堀として築城された経緯があり、水量も豊かだったという。

ここには、豪商戸谷半兵衛が私費で架けた久保橋（後に相生橋）と呼ばれる橋があったが、これも暗渠化されたときに取り壊されてしまった。

 久保橋（相生橋）があった交差点を望む



交差点の下に水路がある

この交差点から50メートルほど西に進み、細い道を北に向かう。
正面には、円心寺の立派な山門が見える。

円心寺



円心寺は、二代本庄城主小笠原信之が、家康の四天王と言われた実父酒井忠次の供養のため慶長 8 年(1603 年)に建立したもので、元禄 6 年(1693 年)、鴻巣宿勝願寺の末寺となった。

安置されている仏像の一つに木造の観音菩薩像がある。伝えによると、これは応永年間(1394 年～1428 年)に村民の文次郎の祖先が阿波国より持参し、明和年間(1764 年～1772 年)に当寺に納めたものらしい。

山門は本庄市指定文化財で、仁王像は天明 8 年(1788 年)の作と言われている。立派な楼門で二層には梵鐘(つりがね)がかかっている。

本庄城

来た道を少し戻り、先ほどの交差点から久城堀跡の道路を北東に進む。
信号のある交差点を左折して50メートルほど行き、細い道を右折して50メートルほど進むと「本庄城址」の碑と城山稻荷神社の鳥居の前に出る。



本庄城は、いわゆる前期本庄城と後期本庄城とに分けることができる。

現在の本庄城址は後期本庄城を指している。

前期本庄城は、弘治2年（1556年）、本庄宮内少輔実忠が古河公方家を迎え撃つために築城したとされている。

その場所は諸説あるが、久城堀の東側と考えられる（中山道分間延絵図では「古城跡」と記されている）。

本庄氏は山内上杉氏に属したが、永禄10年（1567年）に北条氏に攻められて落城し、そののち北条氏に服した。

実忠の死後、本庄隼人正近朝が家督を継いだ。天正18年（1590年）豊臣秀吉の小田原攻めの際に北条氏と運命を共にし、落城。ここに、本庄氏は滅亡した。

後期本庄城は、天正18年（1590年）、徳川家康が江戸に入府するに当たって、その家臣である小笠原信嶺が伊那の松尾城（長野県飯田市）から本庄に移封となり、久城堀西岸に築かれたものである。

元禄13年（1700年）の城跡検地帳には3町4反5畝29歩（約3.4ヘクタール）とあり、北側の崖下には元小山川が流れ、南東は久城堀で切断された要害であった。

小笠原信嶺は、伊那飯田の菩提寺であった開善寺を建立し、また、城山稻荷神社（椿稻荷神社）を祭った。

慶長17年（1612年）、その子信之の代に古河城に移封され、本庄城は廃城となった。

城山稲荷神社



石段を下りると県の天然記念物に指定されている御神木の大きな大欅がある。市指定文化財のヤブツバキもあり、古くは椿稲荷神社と呼ばれていた。

通常、神社は小高い所か平地に祭るものであるが、ここは階段を下って社殿に参拝する、珍しい下り参道になっている。本殿には、稲荷神社、八幡神社、八坂神社が合祀されている。

稲荷神社は、本庄氏が久城堀東岸に築いた本庄城（弘治2年〔1556年〕）に勧請したものであるが、慶長17年（1612年）、新城主となった小笠原氏が久城堀西岸に本庄城を移した際に現在地に移転した。

この城山稲荷神社は、参道沿いに約80本の桜が植えられ、本庄市内の桜の名所となっている。4月の第2日曜日には城山稲荷春季大祭も開催される。



ここでさらに寄り道 ～本庄グルメ～

ハナファームキッチン

城山稲荷神社の鳥居前から、来た道に戻り、先ほどの信号のある交差点を東へ100メートルほど進むと左側に地元産野菜が食べられる「ハナファームキッチン」というレストランがある。

オーナーの花里陽介さんは、都内のレストランで7年間修業した後、市内児玉町の実家で3年間農業に従事した経験を持つ。

この地にレストランをオープンしたのは5年前で、コンセプトは「農産物生産者と消費者との橋渡し」。

野菜の栽培やプロの料理人としての経験をもとに、新鮮で安心な地元野菜を使った創作料理を提案している。



東京都品川区内にもレストランを展開しており、そこでも本庄市及びその近郊で生産される野菜を使用している。

「本庄周辺で生産される農産物を広くPRすることにより、わずかながらでもこの地域の知名度アップに貢献できれば」と語ってくれた。

どのメニューも15種類ほどの色とりどりの野菜を使うとともに、それぞれの野菜に合った調理法にこだわり、絶妙の火の通し加減で提供できるように心掛けているとのことだった。



オーナーおすすめの日替わりプレートセット

中山道に戻って西に進むと、「本庄駅入口」交差点に差しかかる。ここを左折し、400メートルほど南に行くと本庄駅北口だ。

旧大政商店

本庄駅北口から高崎線沿いの道を100メートルほど西に進むと、木の塀に石の門、レンガ造りの邸宅が見えてくる。「旧大政商店」だ。

大政商店は、戦前まで米や肥料を扱っていた卸問屋で、深谷の穀物商「大政」の本庄支店として大正9年（1920年）に開業した。



レンガの「うだつ」が左右に立ち、風呂の煙突もレンガ造り。内部は非公開だが、三和土もレンガでできている。



この家に生まれ、今も敷地内の別棟に住む柴崎起三雄さんのお話では、「この建物は、祖父が深谷製（日本煉瓦製造）のレンガで建てたもの。店ではグアノ（海鳥の糞などが化石化したもの）の肥料を商い、最盛期には本庄駅から貨車に積んで東北地方まで販売していた。」という。

その後、戦争で品物が入らなくなり廃業したことから、店舗としての使用期間は短かったが、建物は堅牢で、今でもほとんど破損がみられない。風情ある庭園や広い敷地から往時の隆盛が偲ばれる。



なお、柴崎さんは、元中学校長で本庄の歴史に関する第一人者。「本庄のむかし」など多数の著書もある。



本庄駅入口交差点から西方向を望む



来た道の本庄駅入口交差点まで戻る。再び中山道を西に進むと、右側に埼玉りそな銀行本庄支店がある。

ここは森田助左衛門家の屋敷跡である。森田助左衛門家は本庄宿の名主兼問屋役であり、戸谷半兵衛家とともに本庄宿を代表する豪商である。

四代目助左衛門は人格高潔で、飢饉や、足尾銅山が不況に陥った際の救済など、奇特行為の数々から名字帯刀を許された。また、歌人、国学者としても名を馳せている。

田村本陣

この埼玉りそな銀行本庄支店の西側、現在は月極駐車場となっているところの奥に「田村本陣」があった。

田村本陣の創業は加賀前田藩が寛永 10 年（1633 年）、本庄宿に行列宿泊の本陣を置いたことに始まる。

間口 26 間、奥行 27 間、建坪 200 坪は中山道でも屈指の規模である。

第 14 代将軍徳川家茂に嫁するため江戸に下る皇女和宮も文久元年（1861 年）に宿泊している。

本陣門は明治 10 年頃に一度、島村（群馬県伊勢崎市）の田島家に売却されたが、後に本庄市が買い戻し、昭和 46 年に市の文化財に指定して市立歴史民俗資料館に移築している。



本陣は、一般旅籠とは異なり格式があるが、実は経営は苦しかったらしい。

本陣主人は客の勧誘対策に相当努力したようで、正装して宿の入口で行列を迎えることはもちろん、前泊地まで身内の者が御機嫌伺いに参上したり、ときには、次の宿泊願いに江戸屋敷まで手土産を持って出向くこともあったという。

ちなみに、江戸時代を通じ本陣二軒を最後まで維持できた宿場は、中山道では本庄、新町、松井田、塩名田（長野県佐久市）の四宿だけだった。

戸谷八商店

田村本陣跡のすぐ西側に戸谷八商店がある。



看板には「瀬戸物商。創業永禄三年」とある。

永禄三年というのは1560年。桶狭間の戦いがあった年だ。

ちなみに、東京商工リサーチ埼玉支店の調査によると、この戸谷八商店が県内で最古の企業ということだ。

ちょっと一息



代々、戸谷八郎左衛門を名乗り、本庄村の最初の名主を務めた旧家「戸谷八」を訪ねた。現在は第17代当主の戸谷充宏さんが陶器類を商っている。

戸谷家は旧新田氏の家臣で、元は世良田（群馬県太田市）の辺りで利根川の水運に携わっていたという。本庄に移り住んでからは、宿場の開発者の一人として代々名主を務めてきた。

さて、屋敷は、昔の商家らしく間口に比べて奥行きが深い造りとなっている。

店の奥へは土間が一直線に伸び、何棟かある蔵をつないでいる。蔵には瀬戸物などが置いてあるが、昔は小麦や砂糖も扱っていたそうだ。中庭には屋根を覆うばかりの赤松の大木があり、傍に残る井戸とともに歴史を感じさせる。

その赤松の脇には離れがあって、様々な歴史資料が保存されていた。年に数回、小学生の社会科見学などに開放するのだという。江戸時代に困碁の本因坊が本庄で修業していた話など隠れたエピソードを聞くことができた。

建物を出て屋敷の外にある稲荷神社（戸谷八稲荷）などを見せてもらったが、敷地は、本庄宿開発当初の間口、奥行を維持しているという。

充宏さんは「祖先は明治以降も十間通りの開通などに協力しており、本庄のまちづくりに少しは貢献してきたのかなと思う。」と語っていた。



店の奥に蔵が連なる



戸谷八稲荷

岸屋



戸谷八商店の向かいに岸屋がある。葬儀社である。

もともとは利根川筋で回船問屋を営んでいたらしい。

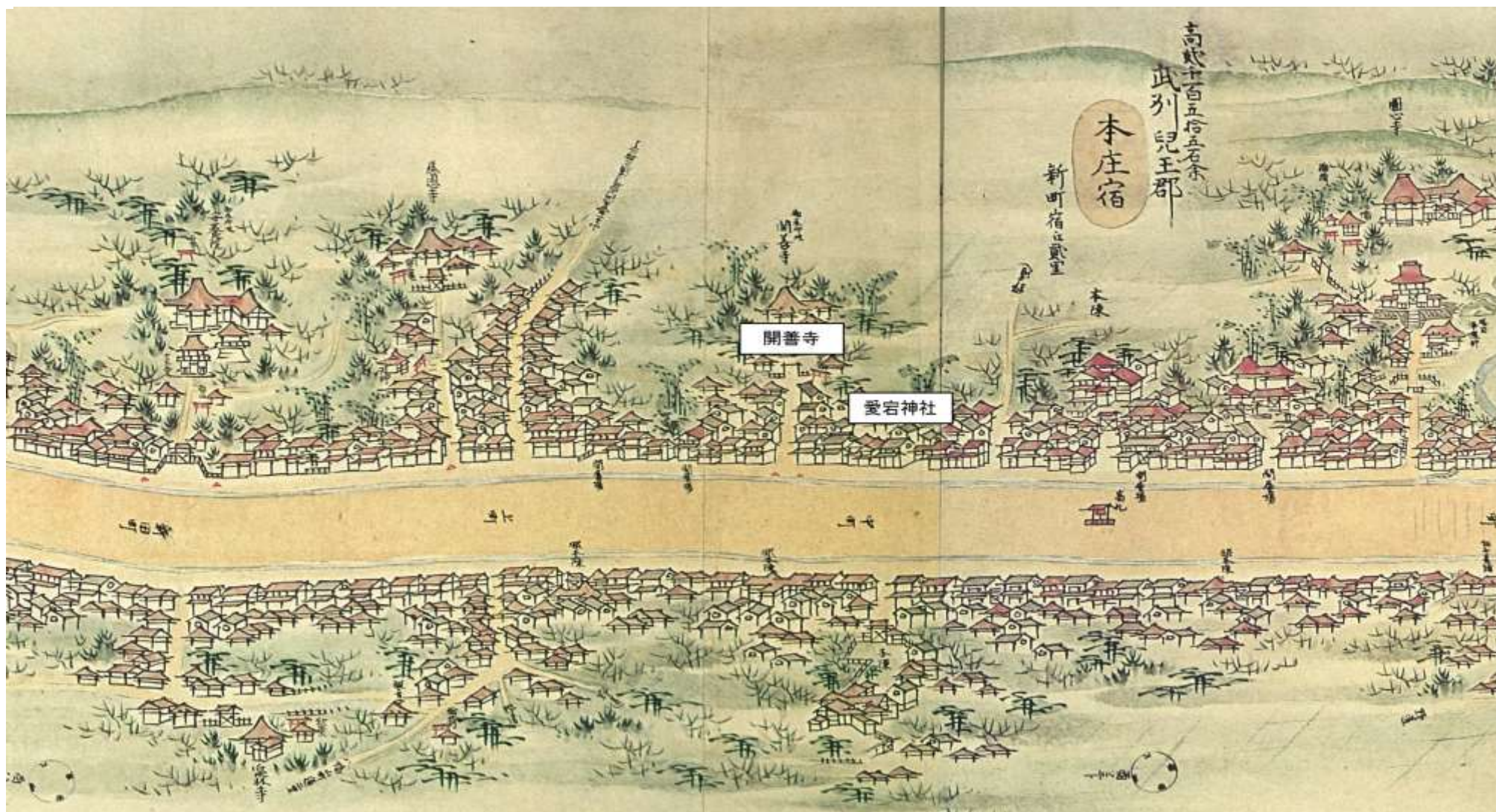
戸谷八も古いがこちらも古い。創業は元禄2年(1689年)だ。

元禄2年といえばまだ江戸時代前期。この年、松尾芭蕉が奥の細道の旅に出ている。

鉄道が開通し、車が普及するまで、物資の輸送は利根川の水運に支えられていたことが偲ばれる。

第4章 旧飯塚医院 ～ 山口呉服店

江戸時代はこんな感じ



これが現在



旧飯塚医院

戸谷八商店から100メートルほど西に進み、足利銀行の先の細い道を右折する。

少し歩くと右側にベージュの洋館風の建物が。「飯塚歯科医院」と「飯塚医院」の2つの看板がある。



今は使われていない様子だったので、奥にある飯塚歯科医院を訪ね、飯塚能成さんに話を聞いた。

「医院の建物は、昭和3～4年頃に建てられたもの。私の祖父が開業し、そのあとを母が継いだ。今はやっていない」とのことであった。

ちなみに歯科医院の方も同じ雰囲気洋館風の建物で、グリーンの外壁があざやかである。

なお、能成さんは、本庄市児玉郡歯科医師会長を務めるかわら、「太平洋美術会」の会員として数々の絵画を残しており、歯科医院の待合室にも「蔵の街」（本書裏表紙）が飾られている。

飯塚歯科医院のすぐ北隣には愛宕神社がある。

愛宕神社



飯塚能成 作

愛宕神社は、天正 19 年（1591 年）に本庄城主小笠原信嶺が勧請したと言われ、愛宕山と呼ばれる古墳の上に鎮座し、神木の大きな榎が枝を広げている。

この榎は樹齢 400 年以上と言われており、昭和 43 年、本庄市指定の文化財となっている。

開善寺の鎮護のために創建されたものと思われるが、神仏分離の後は開善寺の管理を離れ、地元仲町の人々によって祭られるところとなった。

石段脇の庚申塔（安永 10 年〔1781 年〕）は道標を兼ねるもので、「右八まん山道 左よりい道」と記されている。

何これ？

愛宕神社から開善寺に向かう途中、面白いものを発見。

店名が逆さまですけど。

何か深い意味があるのかな？



さらに進むと、つきあたりが開善寺である。

開善寺



本庄城主小笠原信嶺の墓所であり、屋根瓦には武田家の一族であったことを示す三階菱の家紋が見える。

創建当初は壮大な本堂であったらしいが、度々の火災と建て替えて現在の規模となっている。

信嶺公夫妻の墓は門前の道路を挟む南側墓地の古墳の上に、また、二代城主信之公の墓は北側墓地中央にある。

「武田信玄公画像」は織田有楽斎（織田信長の弟）の筆で、市の指定文化財となっている。

ところで、門前の「石の吉岡」にはこんな像が……
本庄らしい。



さて、中山道に戻ろう。モダンな建物が目に留まる。本庄仲町郵便局だ。

本庄仲町郵便局



この郵便局は、秩父セメントの創始者である諸井恒平が昭和9年（1934年）に建築したもの。

外観はタイル張りで、当時世界的に流行したアールデコ調の装飾が階段の手すりなどに採用されている。独特の風格を漂わせており、昭和初期の歴史的景観を留めている。国登録有形文化財である。

ちよっと一息

本庄仲町郵便局の戸谷満局長によると、開局は明治5年（1872年）3月。郵便制度ができた翌年で、県内では13番目の局とのこと。

昭和35年まではここが本庄郵便局の本局だった。諸井泉衛が初代局長で、戸谷局長は11代目である。

「当時、国は郵便制度を普及させるために、地元の名士から土地・建物を提供してもらい、その代わりに彼らを『郵便局長』に任命し、公務である郵便業務を請け負わせるという政策をとった。この郵便局も、諸井家が建てたもので、現在も土地・建物は諸井家から借りている。」と語ってくれた。

耐震補強はしたが、内装はそのままになっているということだ。

その諸井家の住宅は仲町郵便局のすぐ裏にある。郵便局の東隣にある狭い駐車を通り抜けた先だ。

諸井家住宅



諸井家は、代々鳥見役を務めた旧家で、実業家である貫一、外交官の六郎、書道家の春畔、音楽家三郎など多くの名士を輩出している。

この住宅は、10代目諸井泉衛が、開善寺の火災による焼失後、大工に横浜市の洋風建築を学ばせ、明治13年（1880年）に建築したものである。

コロニアル風のベランダ、漆喰でアーチ状に仕上げた天井、色ガラスの窓など、随所に洋風の建築手法が散りばめられている。

県指定の文化財である。

新喜庵

本庄仲町郵便局のすぐ先の中央1丁目交差点を左折すると銀座通りに入る。80m位行くと左手に洋風の建物がある。

この建物の角を左折すると側面は板塀に囲われた2階建の日本家屋となっている。これが新喜庵だ。

銀座通りに面した店先は、数年前まで婦人服の店に貸していた。



建物の所有者の大木紀通さんに話を聞いてみた。

「この建物は明治13年（1880年）生まれの祖父が修行した後に始めた蕎麦屋兼料亭で、昭和50年（1975年）頃まで営業していた。

2階の大広間は結婚披露宴を開くことも可能で、近所に住むご夫婦もここで披露宴を行った。」という。

大木氏に建物の中を案内してもらったが、舞台のある大広間や小間が往時の風情を残していた。

2階から中庭を望む



営業当時の飲み物の料金表

お飲みもの基準表	
御酒	一 二五〇円
ビール	二 二〇〇円
サイダー	三 三〇〇円
ジュース	四 一〇〇円
コーラ	五 一〇〇円
右の通り	六 一〇〇円
各位様	七 一〇〇円
店主	

個人の建物なので内部の公開はしていません。

ここで寄り道 ～本庄グルメ～

電気館カレー

仲町郵便局から少し西に行ったところに、一際目を引く黄色い看板がある。電気館カレーだ。昔、この辺りに「電気館」という県内最古の映画館があったそうで、それが店名の由来になっている。



オープンから8年。宮崎店長は「この辺りは昔は賑わっていた。なんとか昔の賑わいを取り戻したい。」と語る。

2色カレーは赤いトマトのビーフカレーと黄色いピリ辛のチキンカレー。じっくり煮込んであるカレーで、ビーフの方はやや甘め、チキンの方は後からじわっとくる辛さ。同時に二つの味が楽しめる。

ランチカレーは2種類のカレーのどちらかが選べる。トッピングにコロッケが乗っていて、サラダが付いている。

これ以外にも緑のポークカレー、ラーメンや定食など様々なメニューがある。更に月に2回、「昭和カレー」というメニューがあり、ラーメンスープと小麦粉、カレーパウダー、そしてポークで昔ながらの味を再現している。

2色カレー



ランチカレー



夜は居酒屋として営業している。宮崎店長は以前、モンドールというステーキ店をやっていたことがあり、メニューにはイベリコ豚のソテー、和牛ステーキなどが並ぶ。昼とはまた違う顔があるようだ。

まちあい館

電気館カレーのすぐ先には空き店舗を活用した「まちあい館」がある。NPO法人USが運営する施設で、だれでも気軽に立ち寄れる「まちのたまり場」的存在。

建物内にはまちあいボックスという棚を仕切った貸しスペースがあり、会員が持ち寄った野菜の即売なども行われている。



裏手にはベンチが置かれたポケットパークがあり、古い蔵も見える。左右の建物に挟まれた敷地は、間口は狭く、奥行きは深い造りで、宿場町の町屋の形態を伝えている。



うなぎの寝床

まちあい館で見たような、間口が狭く、奥行きが深い、いわゆる「うなぎの寝床」は、伝馬役負担を軽減するための節税対策の名残りである。

本庄宿は中山道開通に伴い人馬継立場とされたことから、伝馬と称して、公用の荷物運搬のために馬と轡取りの人足を常備することが義務づけられた。

その数は、人足 50 人、馬 50 匹で、中山道に面した屋敷にその負担が課せられた。

伝馬役は、表店間口 6 間につき馬 1 匹、間口 3 間につき人足 1 人といったぐあいに、馬と人を屋敷の間口を基準に割り当てられていた。

当初、各屋敷は規定どおり人馬を出していたが、その後、金銭で業務を請負う者が出て、金銭を納める形に変わってきたようだ。

なお、参勤交代や役人の往来の増加に伴い、常備の人馬では不足が生じるようになったことから、近在の村から人馬を挑発する助郷の制度が新たに定められた。



この辺りは、中山道に面した商店の外観は新しくなっているが、一步裏へ入ると昔の生活の息吹を伝える場所に出会える。

この井戸は、明治初期に掘られ、昭和初期に水道が普及するまで 11 の家族が炊事や洗濯に利用していた。

平成 26 年に再建された。



松本時計店

まちあい館の向かい側には松本時計店がある。一見どこにでもある店構えだが、この店には歴史がある。

創業は明治29年（1896年）で、服部時計店（セイコー）の創業から遅れること15年。まだ国内に時計の製造工場はなかったことから、当初はスイス製など輸入品を扱っていたという。



昭和10年（1935年）当時の建物の写真を見せてもらったが、屋根に時計塔がついており、目立つ。

札幌の時計台のような位置づけだったのだろうか。

当時の人たちは、この店の時計塔を見て時刻を確認していたのだろう。



以前使われていた
時刻合わせの標準時計

4代目店主の松本明さんによると「時計塔にはサイレンが鳴る装置がついており、正午に合図のサイレンを鳴らしていたらしい。戦時中に、空襲警報と紛らわしいので外させられたと聞いている」ということで、本庄の街のシンボリック的存在だったに違いない。

なお、松本時計店では、時計塔の伝統に従い、店を建て替えるたびに外観の一部に時計をあしらうことにしており、現在の店舗には軒下に丸型の時計が掲げられている。



すや薬局

まちあい館の隣には、古くから薬種商を営む「すや薬局」がある。



『すや』は漢字で書くと『酢屋』。

「もとをたどると大阪で酢を造っていたようだが、のれん分けなどによって『すや』を名乗る店が各地にある。栗きんとんで知られる岐阜県中津川の和菓子屋『すや』なども関係があるらしい」と7代目店主の中原秀夫さんは話してくれた。

先祖が本庄に店を構えたのは天明元年（1781年）。

その後、分家して台町に移ったりしたが、明治25年（1892年）に現在地に移転したという。



のれんにも『すや』と『酢屋』



店内には昔の薬の看板が掲げられており、歴史を感じさせる。

漢字で「札幌ビール」と書かれた看板もあり、薬屋にビールの看板がかかっていたのもおもしろい。昔は薬だったのだろうか？

本庄市立歴史民俗資料館

さて、すや薬局の横の道を北に進んでみる。80メートルほど行き、左折したところにあるのが本庄市立歴史民俗資料館だ。



明治16年（1883年）に本庄警察署として建設された、この地方で初めての本格的洋風公共建造物。県指定文化財である。

漆喰塗りの大壁造りで、石造りを模した木柱への彫刻、天井の灯火掛け部分のレリーフ、半円窓などモダンな造りとなっており、市民に長く親しまれてきた。

昭和10年（1935年）に警察署としての役割を終えたが、消防団本部、簡易裁判所、区検察庁、公民館、図書館として利用され、現在は歴史民俗資料館となっている。

本庄市のマスコット「はにぼん」のモデルとなった盾持人物埴輪や全国で初めて完全な形で出土したガラス小玉鋳型などが展示されている。

田村本陣の門もここに移設されている。



歴史民俗資料館から元の道に戻り、さらに北に進む。

この道は、旧伊勢崎道で、中山道の迂回路として重要な街道だった。道なりに右にカーブし、二股に分かれるところを左方面に入る。

坂を下ると小さな橋が。寺坂橋と書いてある。何の変哲もないような橋だが、元小山川に架かるこの橋、実は歴史的建造物である。

寺坂橋



明治22年（1889年）の建設。橋長7.6メートル、幅員3.3メートルの石造アーチ橋である。現状では手すりは金属製のものになっているが、当初は手すりも石造であった。

両岸近くの迫石に五角形の切石を用いた特徴的な造りとなっており、石造アーチ橋としては埼玉県最古の橋である。国登録有形文化財。

来た道に戻って中山道に出る。

山口呉服店

中央3丁目交差点の手前にある「山口呉服店」。

間口はそれほど広くなく奥行きが深い、江戸時代の典型的な商家の造りである。中山道に面しているところが店舗で、その裏に蔵、そして母屋とつながっている。

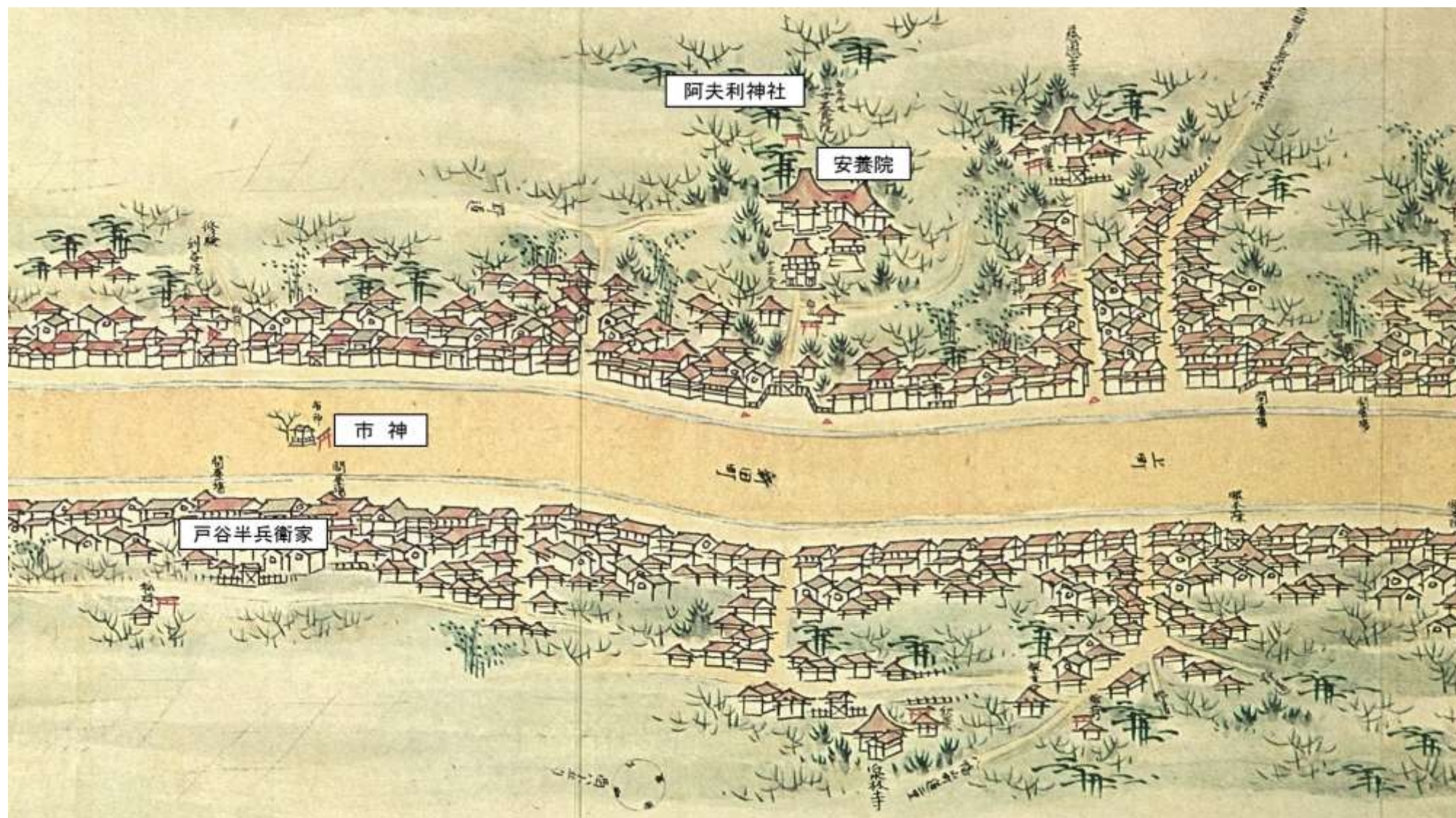
店の人に話を伺ったところ、「創業は1844年なので180年近くになる。昔から呉服店だった。」とのことで、明治35年の埼玉県営業便覧には「太物洋物商 山口金蔵」と記してある。

立派な門が残っており、母屋も歴史を感じさせる。

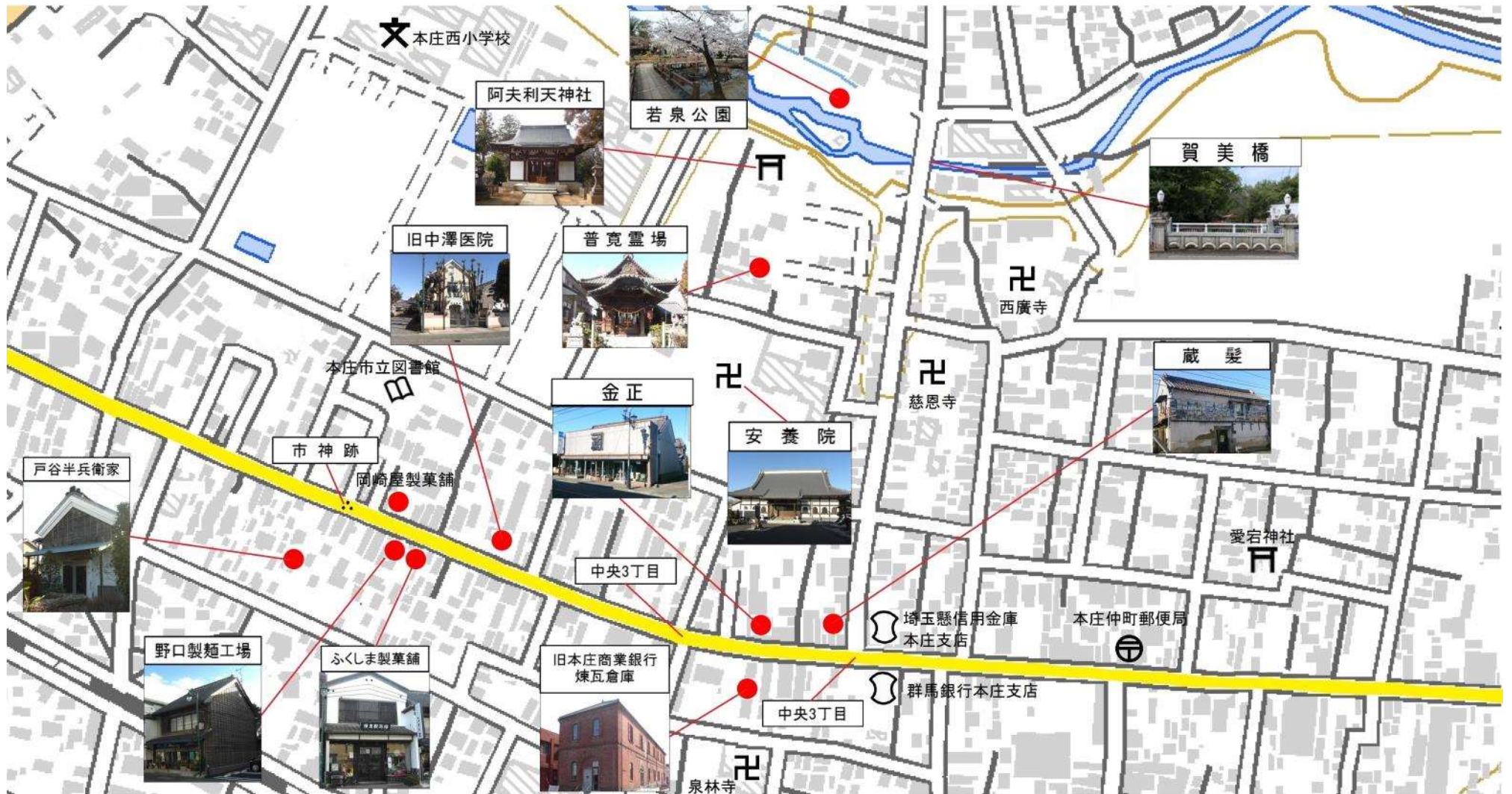


第5章 賀美橋 ～ 本庄市立図書館入口（市神）

江戸時代はこんな感じ



これが現在



賀美橋

中央 3 丁目交差点から中山道を外れて北に向かう。この道は本庄市と群馬県伊勢崎市を結ぶ伊勢崎新道と呼ばれる道だ。

300 メートルほど下り坂を進むと小さいながらもモダンな橋がある。これが賀美橋だ。



伊勢崎新道の開削に伴って大正 15 年（1926 年）に建設された鉄筋コンクリートの桁橋で、国登録有形文化財である。

親柱の各面には三角ペディメントがついており、また、橋の下部にある 7 つの連続アーチには縁に白いタイルが張り付けられている。凝った造りだ。

親柱の上部に家型の装飾が施されており、当初はその上にガラス製の柱灯と受台があった。

市民グループからこれを復元しようという動きが出て、平成 29 年 3 月、本庄市によって白いランプが四隅に設置された。それぞれ強化プラスチックでできており、祭りなどのイベント時には点灯される。

賀美橋の西側には若泉公園が広がっている。

若泉公園



川をめぐる遊歩道や赤い太鼓橋が印象的なのどかな公園で、本庄市民の憩いの場となっている。

公園の急崖は烏川の浸食によって形成されたもので、以前は崖際から豊富な湧水があった。安養院の山号「若泉山」もこれに由来している。

公園内を流れる元小山川の旧川は、崖下より湧く清冽な清水を水源としており、公園より上流一帯は清水河原とも呼ばれていた。

しかし、近年は湧水も止まり、現在はポンプで汲み上げた水を流している。

桜の名所として知られ、春にはソメイヨシノを中心に約 160 本の桜がきれいな花を咲かせる。

例年、4 月初旬の日曜日に若泉公園桜まつりが行われる。

若泉公園から中山道方面に向かって進む。若泉公園のすぐ南側にあるのが阿夫利天神社だ。

阿夫利天神社



石尊様とも呼ばれている。

山と雨乞いの神様を祭る阿夫利神社と火雷天神の神様を祭る天神社が大正 2 年（1913 年）に合社し、阿夫利天神社となった。

社伝によると、阿夫利神社は、寿永年間（1182 年～1184 年）に児玉党の本庄庄太郎家長が、かねてより信仰していた相州大山石尊大権現を勧請したのが始まりである。

その隣接地に安養院が開基されると、明治初年の信教分離まで同寺が別当職を務めた。



一方、天神社は、天正 2 年（1574 年）、本庄城主本庄宮内少輔実忠の命により城の鎮守として奉斎されたことに始まる。

寛文 7 年（1667 年）に慈恩寺境内に移され、その後、阿夫利神社に合祀された。

平成 12 年に放火により社殿が焼失したが、御神体が残り、平成 14 年に再建された。

阿夫利天神社の南側には普寛霊場がある。

普寛霊場



密教御嶽教の開祖である普寛上人の墓がある。

普寛上人は、享保 16 年（1731 年）、現在の秩父市大滝に生まれ、本名を浅見好八といった。青年時代は秩父直神陰流の達人だったらしい。

34 歳の時、人心救済を決して修験者となり、名を本明院普寛と改めた。その後、厳しい修行を経て神仏両道の奥義を究めたという。

木曾御嶽山、上州沼田の武尊山、越後の八海山などの登山道を開いたことでも有名である。

享和元年（1801 年）9 月に本庄宿で病没し、安養院に葬られた。現在の霊場は、大正 11 年（1922 年）に安養院境内から移されたものである。

上人をしのんで、毎年 4 月 10 日、10 月 10 日に全国から信者が集まり、大祭が行われている。

春の祭りでは、お祓いパレードや稚児行列のほか、境内で、火渡り・刃渡りなどの荒行が行われる。

安養院

普寛霊場から伊勢崎新道に出て 150 メートルほど南に進み、細い道を右折して少し行くと安養院の門前に至る。



曹洞宗の寺で、山号を若泉山、寺号を無量寺という。文明 7 年（1475 年）創建。

本尊は無量寿如来で、ほかに脇立として観音と勢至の 2 つの菩薩がある。



もともとは、児玉党の本庄信明の弟、藤太郎雪茂が仏門に帰依し、当時の富田村（在の本庄市東富田）に安入庵を営んだが、その土地が水不足だったため、水源が豊かだった現在地に移設し、安養院を開基したと伝えられている。

この付近は水不足に悩まされることもなく、“若泉の荘”と呼ばれていたという。現在の若泉公園も当時は安養院の境内であった。

本庄城落城後衰退したが、その後再興され、慶安 2 年（1649 年）に徳川幕府から 25 石の朱印地を受けている。

戸谷半兵衛家や森田助左衛門家といった本庄宿の豪商たちの墓所でもある。

蔵髪

安養院から伊勢崎新道に戻り南に進むと、中央3丁目交差点の手前にちょっと目立つ蔵がある。



看板を見ると「蔵髪」(くらっぱ)となっている。蔵を美容室として使っているようだ。この蔵は、江戸時代には文具店丸十商店が倉庫として使っていたものらしい。

本庄市の中山道沿いには多くの蔵が残っているが、実際に店舗に使われているものはそれほど多くない。



ちょっと一息

店主の植村貴之さんに話を伺った。

「自分は横浜育ちで、以前は横浜で美容師をしていたが、妻の実家が本庄市児玉町ということもあり、平成25年、ここに店をオープンした」

蔵を使った理由は「もともと城や蔵が好きだったし、蔵を美容室にすればインパクトがあると考えた」とのこと。見事に160年前の蔵を再生している。

2階を見せてもらったが、立派な梁が目につく。柱には「安政3年棟上げ」という文字が記されている。安政3年は1856年だ。

「2階は冬でも暖かく暖房がいらぬ。また、夏は涼しい。蔵好きの自分にとっては趣味と仕事が両立できて満足している」と語ってくれた。

旧本庄商業銀行煉瓦倉庫

中央3丁目交差点から中山道を西に向かって歩くと、左側にレンガ色の建物が目に入る。旧本庄商業銀行煉瓦倉庫だ。



この建物は、明治29年（1896年）に、銀行が融資の担保として預かった大量の繭を保管するために建築したものだ。

昭和51年からはローヤル洋菓子店として使われていたが、平成23年本庄市の所有となった。

レンガ造り2階建て寄棟造りで、日本煉瓦製造のレンガが使われている。桁行約36.4メートル、梁間約9.1メートルで、レンガはイギリス積みである。

全国有数の繭の集散地として栄えた本庄市と繭の生産拠点であった周辺地域の歴史を伝える上で貴重な建築物である。

本庄市で改修工事を実施し、平成29年4月から交流・展示スペース、多目的ホールを備えた地域の交流拠点として生まれ変わった。

本庄市の繭市場（明治45年）



資料提供：本庄市教育員会事務局文化財保護課

金正

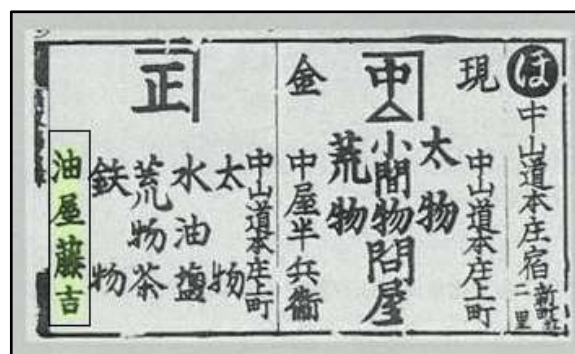
旧本庄商業銀行煉瓦倉庫の向かいに歴史を感じさせる店を発見。金物、日用雑貨を扱う金正だ。江戸時代は「油屋藤吉」という店名だった。

主の中村さんに話を聞くことができた。



「創業して300年。もともとは油屋で、現在は刃物、金物を扱っている。この建物は慶応年間に建てたもの」という。慶応と言えば江戸時代最後の元号である。

「商家高名録」(文政8年〔1825年])にも豪商中屋(戸谷)半兵衛と並んで掲載されている。



店舗の裏、安養院までが金正の敷地だ。間口も広いが、奥行きもある。

一番奥に立派な蔵があった。尋ねると「店のすぐ裏にあったものだが、壁の剥がれがひどかったため、今の位置まで曳家して修繕した」という。

曳家されたという蔵の横には見事な金木犀の大木があった。



中村さんの先祖は近江の出ということで、「江戸時代は油を近江から水運(帆かけ船)で運んでいた。昔は馬屋もあって、利根川の船着き場まで馬で油を引き取りに行っていた」という。

金正を出て西に向かって歩くと、すぐに「中央3丁目」交差点に差しかかる。

あれっ？

何これ？



手前の交差点も「中央3丁目」だったはず。同じ名前の交差点があるんですね。ちょっと紛らわしいかな。

さらに西に向かって歩みを進める。注意して歩くと、この辺りは、中山道から少し奥に入ったところに蔵がたくさん見られる。

旧中澤医院

少し行くと、右側に目立つ洋館風の建物がある。看板は、右から左に「中澤医院」となっている。



この建物は大正15年（1926年）に建てられたものらしい。新しい医院が別の場所に新築され、医院としては現在使用されていない。映画等のロケによく使われているということだ。

旧中澤医院から歩を進めると、今度は左側に歴史のありそうな建物が2軒並んでいる。東側の家が「ふくしま製菓舗」、隣が「野口製麺工場」だ。

ふくしま製菓舗



蔵を利用した和菓子屋さんのような。店の福島直子さんに話を聞いてみる。

「うちは昭和の初めから菓子屋をやっている。40年前に建て替えた時に蔵風の建物にした」

こんな話も聞かせてくれた。

「ここからちょっと西に行ったところに金鑽神社がある。そこでは、出雲大社に行っていた神様が帰ってくる11月1日(旧暦)の午前零時に神様をお迎えする『神迎祭(お神迎え)』という祭事が行なわれる。

参拝の帰りには『福を買う』ということで、お菓子屋さんで豆大福を買って帰る」のだそうだ。

ただ、「昔はたくさん店が出て賑わっていたが、今ではお菓子屋で店を開けているのは、うちと岡崎屋製菓舗さんの2軒だけになってしまった」と語ってくれた。

ちなみに、このふくしま製菓舗の一押し商品は「宿場娘」。

渋皮付きの栗を白あんで包み、ホワイトチョコレートをコーティングしたもので、上品な味わいが特徴だ。



こちらの店の生和菓子は、多くの茶道の先生から御贖いいただいているらしい。

野口製麺工場



ふくしま製菓舗の隣にあるのが野口製麺工場。麺類各種を製造・販売している。

かなり歴史を感じさせる建物だ。

店の次女の内海由美子さんに話を聞いた。

「ここに住んで今が6代目で店は江戸時代からやっている。この店舗は大正5年(1916年)に建てたもの」とのこと。100年以上経っている。

ここからすぐ西側に、江戸時代の豪商戸谷半兵衛家があるが、

「うちの初代は戸谷半兵衛の店の番頭で、のれん分けをしてもらった。戸谷半兵衛の店が『中屋』で、うちが野口だからそれを合わせて店の名前は『中野屋』になった。今は『野口製麺工場』という名称だが、店の入口のガラスには、昔書いてもらった『中野屋製麺工場』という文字がそのまま残っている」と話してくれた。

この建物に惹かれるのか、「中山道歩きをしている人がよく立ち寄ってくれる」らしい。



レトロ感たっぷりの店内

ここから西に50メートルほど行くと左側に「本庄市立図書館」という案内板があり、その少し奥まったところに戸谷半兵衛家がある。

関東有数の豪商 戸谷半兵衛

戸谷半兵衛家は享保18年（1733年）に初代戸谷光盛が「中屋」を創業してから、中屋半兵衛の名で太物、小間物、荒物を商い、「関八州田舎分限角力番付」（豪商番付）では西方筆頭の大関として位置付けられていた。

安永2年（1773年）には本庄宿のほか、江戸に5店舗、さらに京都六角通りにも店を構えており、本庄店の使用人だけでも39人いたという。

3代目半兵衛光寿のころには江戸で両替商を開業し、越中前田家、立花家、鍋島家など大名への融資も行っていった。この3家だけでも15万両を超える貸付けがあったという。

初代から慈善活動に熱心で、先に紹介した馬喰橋や相生橋を私費で石橋に架け替えたほか、神流川の渡し場に土橋をかけ、無賃渡しも自らの拠出した資金で実施した。

この渡し場に常夜灯を建立したのは3代目で、これらの功績により幕府から名字、帯刀を許されていたという。

しかし、4代目のときに大名への融資金の回収ができなくなり、貸金の中に代官所からの御用金も含まれていたことから、家財闕所の処分を受けた。





中山道から少し奥まったところにある戸谷家を訪れ、9代目に当たる圭一郎さんに話を伺った。

今でも十分な広さがあるが、昔は、北は図書館辺りまで、南はカトリック教会の先までが所有地だったらしい。古文書なども数多く残されていたが、個人では管理しきれないことから、数年前に県立文書館に委ねたという。

圭一郎さんによると、戸谷半兵衛家は初代から3代目までが最盛期で、江戸への出店を通じて次第に幕府とのつながりを強め、金の改鑄などにも関わるようになった。

天保の改革で有名な水野忠邦に近づき、金を融通していたらしいが、彼が失脚すると代官なども皆代わり潮目が変わってきたという。大名たちが借りの金を返してくれなかったこと、店が大きくなりすぎて使用人の監督が十分でなかったことなども稼業が衰退した原因だという。

幾多の慈善事業で本庄宿の繁栄に寄与してきたことに話が及ぶと、なかでも神流川の無賃渡しは特筆すべきことと語ってくれた。なお、溪斎英泉の浮世絵「本庄宿 神流川渡場」（本書表紙）に描かれた大名行列は、戸谷半兵衛が金を貸していた越中前田家の行列らしいとの逸話も披露していただいた。

中山道に戻る。中山道分間延絵図によると、江戸時代にはこの市立図書館入口辺りに市神（西の市神）があったらしい。

市神

市神は、市の取引の無事や幸福を与えると信じられている市の守護神。

神体は円形の自然石が多く、神社の境内や市の開かれる場所の路傍に祭られていた（中山道分間延絵図でも道の真ん中に描かれている）。

本庄宿には、本町の市神（東の市神）と新田町の市神（西の市神）があり、定期市が開かれた寛文3年（1663年）に建てられたものである。

本庄宿には以前定期市がなかったが、榛沢村（現在の深谷市）に交渉して定期市開催の権利を譲り受けた。市神はその時に榛沢村から移転したものである。

ちなみに、西の市神は金鑽神社に合祀されている。

ところで、中山道の道の真ん中と言え、江戸時代末期に本庄宿でとんでもない事件があったとされる。

本庄の事件簿 ～新選組大篝火事件～

京都守護の任につく第14代将軍家茂の警護を目的に、幕府は文久3年（1863年）、その前年に結成した浪士隊（後の新選組）を京都に向かわせた。一行は2月8日に江戸を出立。2月10日、3日目の宿泊地となる本庄宿に入り、ここで事件は起こった。

宿割役池田徳太郎、同手伝役の近藤勇が本庄に先乗りし、隊の宿割をしたが、どうしたわけか芹沢鴨の宿所を書き忘れてしまった。夕方になり本隊が到着したが芹沢鴨の宿がない。

芹沢鴨の難物ぶりはつとに知られるところ。芹沢は烈火のごとく怒った。両名は早速宿の手配をして芹沢に詫びたが怒りは収まらない。

「宿がなければ外で寝る。篝火を焚け」と部下の土方歳三、沖田総司、永倉新八などに命じ、手当たり次第に木材を集めさせて宿の真ん中で大焚火を始めた。

驚いた宿役人が駆けつけて咎めると、芹沢は大鉄扉を振り上げて宿役人を殴り倒した。火の粉は宿中に降り、宿民は火事になっては困るからと水桶を持って屋根に登って火の粉を消す始末で、寝ることもできない。

池田と近藤の再三の謝罪によって芹沢は用意された部屋に入り、ようやく大篝火事件は落ち着いた。

この事件を伝える記録は残念ながら本庄には残っておらず、真偽は不明でフィクションと考えられてきた。

その後、新選組浪士の一人、永倉新八が晩年を過ごした北海道で新聞記者の取材に応じ、新選組について語ったものが小樽新聞に掲載された。

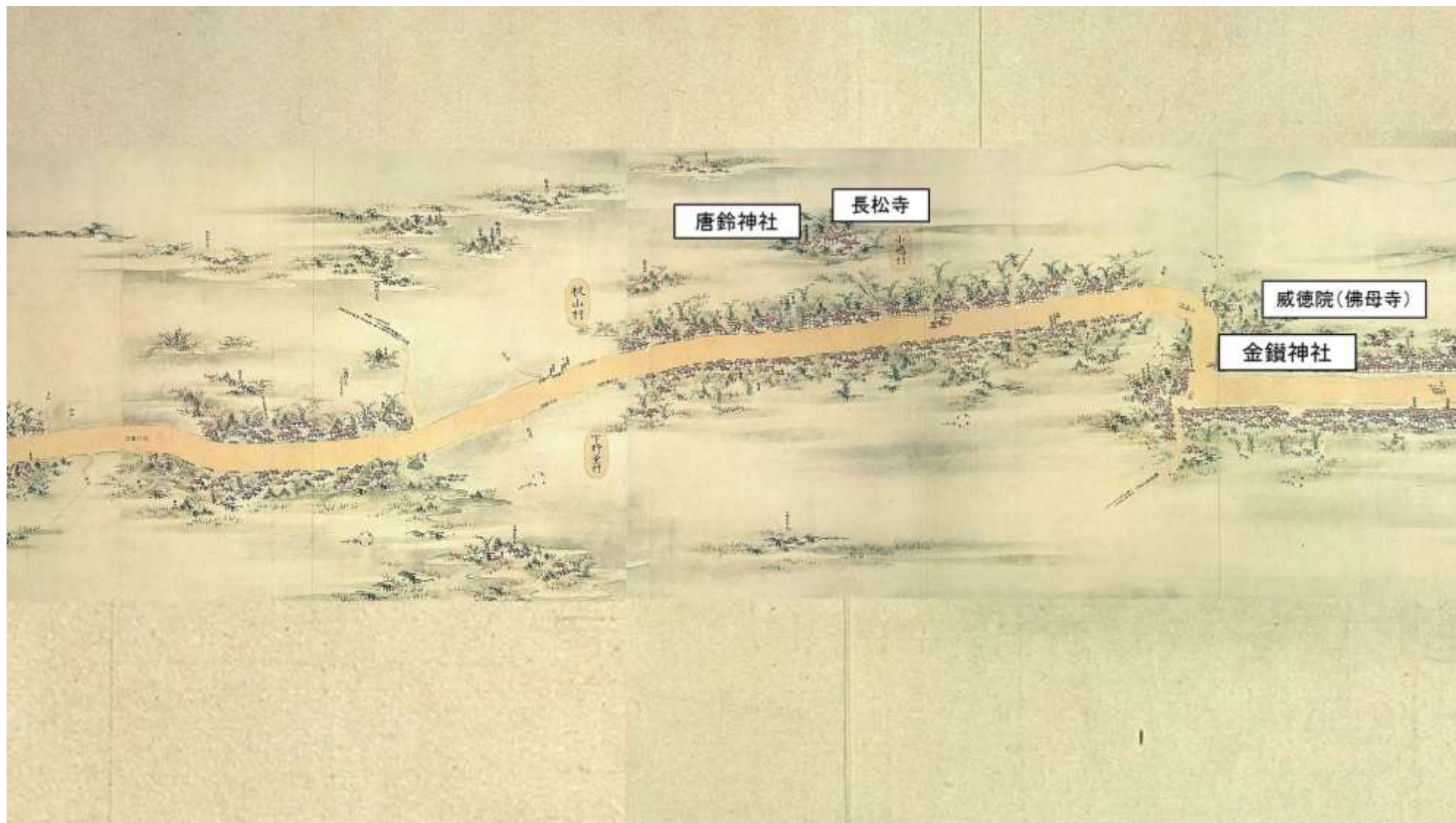
それによると、「芹沢は粗暴の拳動ある有名な壮士、さあ宿がないというので大立腹で、急に3番組の隊員を集め野陣を張ると言い渡し『大篝火を焚くから驚くな』と宿中に触れ出した。間もなく本庄宿の夜は天を焦がさんばかりの大篝火に照らされて物凄いような光景となった・・・」となっている。

なお、柴崎起三雄氏は「本庄のむかしこぼれ話（平成29年7月発行）」の中で、宿割を忘れたのは近藤勇ではなく、上州薮塚出身の岡田盟だとの新説を発表した。さらに、焚火騒動があったのは大正院近くの台町ではないかとも推測されており、大変興味深い。



第6章 本庄宮本・蔵の街 ～ 唐鈴神社

江戸時代はこんな感じ



これが現在



本庄市立図書館入口から西へ80mほど進むと右手に大きな蔵が3棟見えてくる。中山道から奥に向かい、板張りの蔵、白壁の蔵、赤煉瓦の蔵と3つの蔵が並んでいる。ここが「本庄宮本・蔵の街」だ。

本庄宮本・蔵の街



これらの蔵は明治43年から平成21年まで酒問屋小森商店の本庄支店として使われていた。

小森商店は、騎西にある蔵元で、現在は株式会社釜屋の名で清酒「力士」を販売している。

- 一の蔵（板張り、元は黒漆喰）は明治12年築造の書類の保管蔵。
 - 二の蔵（白壁）は明治22年築造の味噌、醤油の蔵。
 - 三の蔵（赤煉瓦）は大正10年築造の出来上がった酒を保管する酒蔵。
- それぞれ築造された時代によって外装が違うのが面白い。

小森商店開業前の江戸時代、ここには「穀屋」という店があり、穀物、醤油などを扱っていた。文化年間には旅籠屋も経営していたそうだ。

一の蔵、二の蔵はその穀屋の時代に、三の蔵は小森商店時代に築造されたもので、小森商店の閉店後、市民グループ「本庄まちNET」の保存運動により、平成22年、「本庄宮本・蔵の街」として生まれ変わった。



「本庄まちNET」代表で一の蔵に建築設計事務所を構える戸谷正夫さんは、「蔵のある街並みを残そうという民間のプロジェクトでできた街。ヨーロッパもそうだが、その土地の記憶があるものは残しつつ、新しいものを作っていくのが大事だと思う。

蔵の中は暗いのでは？とよく聞かれるが、そうでもない。居心地は素晴らしい」と話してくれた。

現在、二の蔵はカフェ、三の蔵は行政書士事務所になっている。

ここで寄り道 ～本庄グルメ～

cafe NINOKURA

「本庄宮本・蔵の街」の3つの蔵のうち、白壁の二の蔵には、ほっこりと居心地の良いカフェが入っている。その名も「cafe NINOKURA」。

店の中に入ると包み込まれるような安心感。テーブルやイスなどは再利用したもので、不揃いだがどこか懐かしいものばかり。不思議と落ち着く空間である。

1階はカフェ、2階は板張りで20帖あり、幅3mのスクリーンを備えたフリースペースとして貸し出している。

蔵主の飯塚さんは「これはいいと思った地元の旬の食材を活かした料理を出している」という。

「今日のごはんプレート」
「つみっこ膳」ともに優しい味付けでからだが喜ぶランチだ。

飲み物に付くちょこっとデザートもうれしい。

メニューには食材の仕入先が表示されているので安心できる。

ご当地グルメ「つみっこ膳」



中山道に戻り、さらに西に進む。250メートルほど行くと右側にあるのが金鑽神社だ。

金鑽神社



社伝によると、創立は欽明天皇の2年（541年）となっている。武蔵七党のひとつである児玉党の氏神であり、本庄城主歴代の崇信も厚かった。本庄宿の総鎮守である。

境内は欅や銀杏などの老樹に囲まれ、本殿と拝殿を幣殿でつないだいわゆる権現造りの社殿のほか、大門、神楽殿、神輿殿などがある。

本殿は享保9年（1724年）、拝殿は安永7年（1778年）、幣殿は嘉永3年（1850年）の再建で、それぞれ細部に見事な極彩色の彫刻が施されている。

幣殿には本庄宿の武正南慮や小倉紅於らが描いた花鳥画がある。

この金鑽神社社殿は、平成29年3月24日、県の有形文化財（建造物）に指定された。





御神木となっているクスノキの巨木は県指定の天然記念物で、幹回り5.1メートル、高さは約20メートル。寛永16年（1639年）本庄城主小笠原信嶺の孫にあたる忠貴が社殿建立の記念として献木したものと伝えられている。

絢爛豪華な山車が中山道を巡行する秋季大祭（本庄まつり）をはじめとして年中行事も多い。

年中行事の一つ「神迎祭」は、神無月（10月）に出雲大社に行っていた神様が帰ってくる11月1日（旧暦）午前零時に神様をお迎えする特殊神事。

中山真樹 宮司によると、「神社ではお参りに来た人に熊手を授けているが、町中の商店も協賛してそれぞれの店の商品を配布するので、以前は午前4時頃まで賑わっていた」そうだ。

今は午前1時頃には一段落するそうだが、最近あまり見なくなった真夜中の行事である。

参拝帰りに、和菓子屋で「大福」を買って帰ると福を招くといわれている。

金鑽神社のすぐ北側にあるのが佛母寺だ。

佛母寺

佛母寺は、もとは山号を金鑽山威徳院白蓮寺といい、高野山聖僧威徳房玄正が天授元年（1375年）に開創したとされている。

金鑽神社の別当寺で、明治期に神仏分離令により廃寺となった。

明治17年（1884年）に壇信徒の発起により再興を出願。翌年、佛母寺として再興された。

鐘楼の「妙音殿」額は元総理大臣吉田茂の揮毫による。

金鑽山威徳院白蓮寺の建物としては、文化11年（1814年）建立と伝えられる大門が金鑽神社に残っている。



佛母寺の銭洗弁財天（本庄三弁天）

佛母寺には、銭洗弁財天がある。ちょっと漫画チックな微笑ましい顔立ちで癒される。

立札には「この浄水にて硬貨、紙幣を洗い清め、資本金としてお持ち帰り、ご家業にご精進ください」と書いてある。試しに一万円札を洗ってみたが、効果はいかに・・・。



本庄には銭洗弁財天が3体ある。
 大正院には黄金色に輝く弁天様があり、弁天堂の中に鎮座している。
 慈恩寺の弁天様は優美な姿で、龍の口から流れる水でお金を洗うと
 財宝に恵まれるそうだ。
 一つの市内に3体の銭洗弁財天があるというのは珍しい。



なお、本庄市内にはこの3体の弁財天を含む10の社寺に「武州本庄七福神」が点在しており、七福神めぐりをテーマに街を散策してみるのもいいだろう。

〈本庄七福神めぐりマップ〉



中山道に戻り、金鑽神社を少し西に進むと「千代田 3 丁目」交差点に差しかかる。ここを右折する道（国道 462 号）が中山道だ。

ここは下を向いて歩こう。歩道に中山道各宿の名前を記した絵タイルが貼られている。千代田 3 丁目交差点から高尾歩道橋手前までで、長さは 100 メートル余りだ。



中山道はその高尾歩道橋のところを左折する。350 メートルほど進むと千代田 3 丁目交差点を直進した県道と合流する。

合流地点から 250 メートルほど行くと「小島 4 丁目」交差点に差し掛かるが、ここを右折して少し行った右側にある寺が長松寺だ。

長松寺

唐鈴山薬師院と称する弘法大師空海を宗祖とする真言宗の寺である。開山は祐海法印で、創建年代は江戸時代初期と思われる。

本堂の西側及び北側の山林の中に土塁、空堀が残っている。これは、館址の遺構で、武蔵武士のひとつ丹党の一族小島氏の居館址と伝えられている。

この周辺にあった百余基の古墳は旭・小島古墳群と命名され、県選定の重要遺跡となっている。



本庄市のマスコットキャラクター「はにぽん」のモデルとなった盾持人物埴輪は、この古墳群の中の「前の山古墳」から出土している。

長松寺入口から道路に沿って 200 メートルほど見事な銀杏並木が続く。唐鈴神社の参道で、晩秋には紅葉した黄色の帯が本殿まで続き美しい。隠れた撮影スポットだ。

唐鈴神社



社伝によると、遣唐使として唐に渡った大伴宿根古麿が天平勝宝年間（749年～757年）に帰国の折、唐の玄宗皇帝より渡海安全のための金鈴を授けられた。

その孫である良麿がこの地に赴任し、五穀豊穡を願って社を創立したが、しばらくして、帰京を任せられた良麿は、神宝の盗難を恐れ、それらを石函に入れ社の下に埋めた。

幾歳月が過ぎ、戦乱の世に社も破壊されたが、これを嘆いた近在の人々が再興のため社跡を掘ると石函が出土し、中に5つの金鈴があったという。これが唐鈴神社の由来である。

ところで、この神社には魔物伝説が……………。

貞観4年（862年）、この辺りでは天災や不吉なことが続いた。

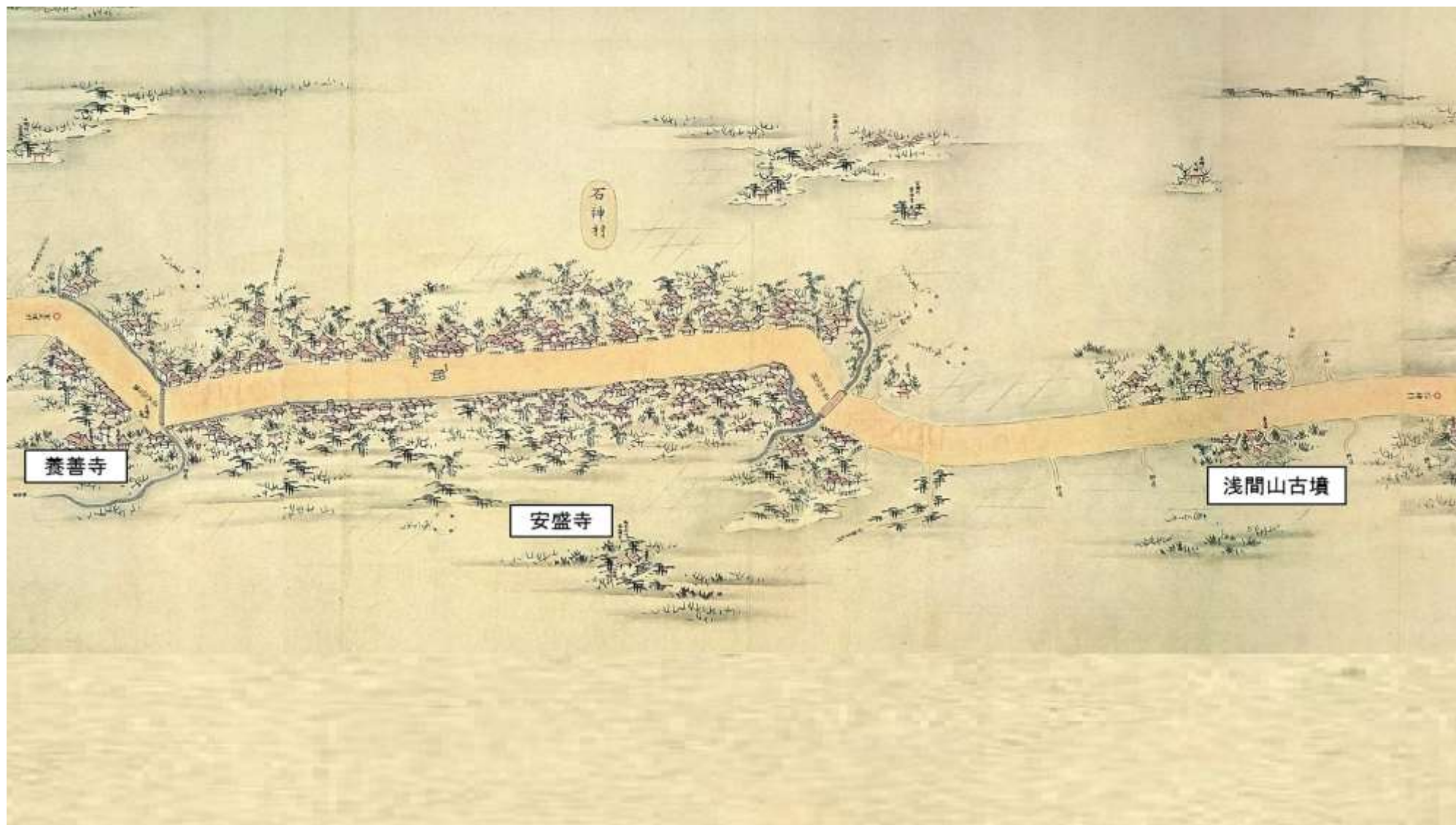
そこで、国司は神官に命じて火雷神社（群馬県玉村町下之宮）で神事を執り行わせようとし、副使として那波八郎廣純を同行させた。

神官が祈祷を行っていたときに魔物が姿を現し、神鏡を奪おうとしたので那波八郎廣純は刀を振ってその首を切り落とした。

このとき、魔物の折れた角を川に投げ、後に淵になったところが現在の玉村町「角淵」であり、切った手を捨てたところが玉村町「上之手」（神の手）、そして、魔物の首を祭ったのがこの唐鈴神社とされている。

第7章 浅间山古墳～ キムラヤ乳業

江戸時代はこんな感じ



これが現在



浅間山古墳

中山道の旅もいよいよ上里町に突入。西に向かって進むとすぐ左側に小高い山と赤い鳥居が現れる。浅間山古墳だ。



本庄市西部から上里町東部に広がる旭・小島古墳群の一基で、7世紀前半に造られた横穴式石室を持つ古墳である。

直径約38メートル、高さ約6メートルの円墳と考えられ、古墳の上には富士浅間神社が祭られている。

昭和2年の調査で直刀や矢じり、金環などが発見され、一部は東京国立博物館に保管されている。

石室がむき出しになっており、古墳に上ると中の様子を見ることができる。



ところで、巷の話では、江戸時代にこの石室内で夜な夜な賭博が行われていたらしい。

通りからは死角になることから、明かりも音も外には漏れないと考えたのだろう。

蝋燭の火のもと、丁半が繰り広げられる光景が目に見えよう。



中仙道の標柱

浅間山古墳の反対側の根岸家の一角に「中仙道」という標柱がある。

標柱の裏を確認すると「この道は中仙道。今、この呼び名が消えそうなので後世に伝えたく米寿を記念してこれを建てる平成11年4月1日」と記されている。

根岸さんによると、「親父が建てた。ガイドブック片手に中山道を歩く人がよく写真を撮っていく」とのことであった。



泪橋跡

「中仙道の標柱」から少し行くと右側に泪橋跡がある。これも個人の敷地の一角である。

置かれているのは泪橋の石製の欄干の一部だ。

昔は、この辺に小さな川があったらしい。

石碑の裏には「徳川幕府は、大名等が通行する際、街道住民に伝馬という苦役を課した。

住民は、この橋に憩い、家族を偲び、身のはかなさを嘆いて涙を流した」とある。



伝馬とは、宿場の間を公用の荷物を運搬する制度のことで、各宿場には轡取りの人足や馬の常備が義務付けられていた。

往来が激しくなると、人や馬の不足を補うために近隣の村は人馬を徴発され(助郷)、農繁期であっても免れなかったために大きな負担となっていた。

所有者の根岸晃さんに話を伺った。

「手前の石が橋の欄干。後ろの石碑には由来が書いてあり、うちで作った。庭を直す時に一緒にきれいにしたもので、庚申塔や石仏は近くに置き去りにされたものを集めて欄干の横に置いた」とのことである。

安盛寺

西に向かう。「神保原陸橋（北）」交差点を過ぎて 60 メートルほど行き、細い道を左折。70 メートルほど行った突き当りを右に進むと安盛寺がある。



曹洞宗の寺で、昌福寺（深谷市人見）の末寺である。

天正 10 年（1582 年）の神流川の合戦で一切を焼失したが、その後、元和年中（1615 年～1624 年）に奥喜兵衛慰安盛により再興されたことから安盛寺と改称した。



社殿の前に弥勒如来像が鎮座している。もともとは養善寺に建立されたものだが、明治 3 年（1870 年）の廃仏毀釈（仏教を廃毀し僧侶を排斥する宗教政策）で引き倒された上、首を落とされ、頭は地中に、胴体は橋のたもとに埋められてしまった。

それから 7 年経った明治 10 年（1877 年）、村内に疫病が蔓延した。

村民はこれを弥勒如来の祟りだとして頭と胴体を掘り出し、安盛寺に安置したという。



楠森橋から神保原駅入口方向を望む

安盛寺から一旦中山道に戻る。
すぐに御陣場川にかかる小さな橋に差しかかる。楠森橋だ。
この橋の先は鉤の手（直角）に曲がっている。
これは防衛の一手段であり、敵が一気に攻めてこられないように、また、敵を追い詰めやすくするために宿や城下町の入口をわざわざ直角に曲げたものである。



左にカーブし、300メートルほど行くと神保原駅入口に差しかかる。
駅入口から南に向かって400メートルあまり進むと神保原駅だ。

神保原駅



神保原駅は明治30年（1897年）に開設された。

駅名は当時の村名、神保原村（石神村、忍保村、八町河原村が合併）に由来する。

昭和9年築のレトロな駅舎が残っている。

ところで、神保原駅の1番ホームには七福神の像が鎮座している。
さらにこのホームには池もあり、乗客の目を楽しませてくれる。





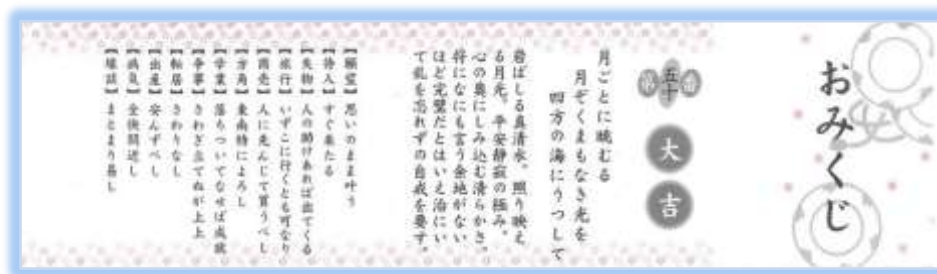
唐澤仲裁駅長に伺った。

「うちの社員は色々なアイデアを出してくれる。ホームの七福神も社員のアイデアで始めたもの。昨年2月にリニューアルし、おみくじ箱も置いた」とのこと。

おみくじの内容は50種類あり、誰でも無料で引くことができる。また、池には鯉や金魚が19匹いるという。

「これからも様々な取組をして神保原駅をPRしていきたい」と話していた。

試しにおみくじを引いたら「大吉」だった。



神保原駅にはこんなエピソードもある。

昭和37年頃の話。

神保原駅では、急行列車の待ち合わせのため普通列車が1日に8本、7～13分ほど停車していた。

ホーム内には水道施設がなかったため、当時の柳沢源太郎駅長の「駅の井戸水は保健所検査でも優良な折り紙つき。この冷たい水をやかんで運べば乗客に喜んでもらえる」というアイデアが実行されるようになった。

当時の新聞は、林間学校に行く児童たちの「ちょうどのどが渴いていたので生き返った」との喜びの声を伝えている。

しかし、昭和40年になると神流川の砂利乱掘で地下水も枯れてしまった。給水サービスは簡易水道を利用して続けられたが、水は生ぬるく乗客たちには不評だった。

これを聞いた駅前のキムラヤ乳業では、「うちの冷蔵庫で水を冷やしましょう」と駅に申し入れ、駅員と同社による冷水サービスが行われるようになった。

乗客は「砂漠のオアシス」と夏の暑さをしばし忘れ大喜びだったそうだ。

キムラヤ乳業

そのキムラヤ乳業は駅を出てすぐ左折すると右側にある。

実はグリコのパピコはここで作っている。

大手メーカーから委託されたアイスの製造が中心だが、冬場は上里町産の小麦と神川町のブランド豚である「姫豚」を使った「こむぎっち肉まん」も製造している。

なお、この肉まんは、上里サービスエリア下り線で購入できる。



代表の木村忍さんは、「クール＆ホットのアイテムでおいしさと癒しを提供している。パピコは全国に向けて出荷。また、こむぎっち肉まんは、地域振興のために何かできないかということで、上里産の小麦と町のマスコットキャラクターである『こむぎっち』を組み合わせで作ったものである」と語ってくれた。



上里町マスコットキャラクター
こむぎっち

さて、中山道の旅を続けよう。

神保原駅入口まで戻り、西にしばらく進むと「神保原 1 丁目」交差点に差し掛かる。

ここは村の出入り口にあたる鈎の手で、右折する道が中山道だ。

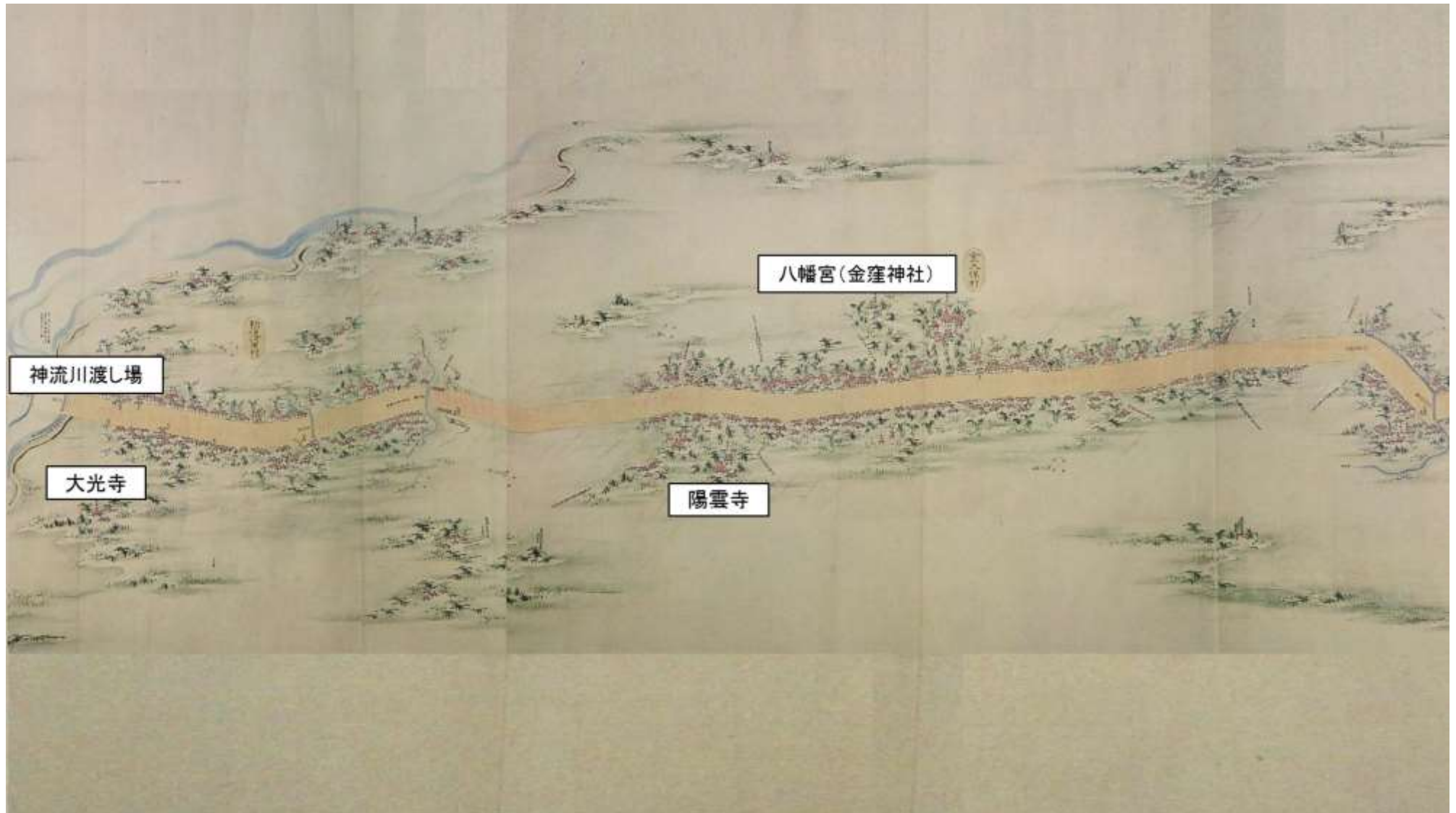
安盛寺の弥勒如来像が元々安置されていた養善寺はこの交差点の西側にあった。



「神保原 1 丁目」交差点を望む

第8章 金窪神社 ～ 神流川古戦場跡

江戸時代はこんな感じ



これが現在



金窪神社

「神保原 1 丁目」交差点を右折して 130 メートルほど行くと国道 17 号の「神保原（北）」交差点に差しかかる。

ここを渡って 750 メートルほど西に進むと右側にあるのが金窪神社だ。

戦国時代の金窪城主斎藤氏が鎌倉八幡宮を城内に勧請したのがはじまり。

神流川の合戦で斎藤氏が滅んだ後は、村人が村の鎮守として祭るようになった。

毎年 10 月には雨乞い獅子と呼ばれる獅子舞の奉納がある。



金窪神社は、拝殿の天井絵と本殿の彫刻が素晴らしいことで知られている。

天井絵（雲竜図）



本殿の彫刻（東面）



拝殿の格天井には 67 枚の絵があり、中央にある雲竜図は祥雲斎俊信によるものだ。また、本殿の東・北・西の 3 面に彫刻がある。

この彫刻は、明治中頃に東京の湯島天神が発注したものだが、どうも寸法が合わなかったらしい。

この話を聞いた上里町出身の岩田忠一郎（大蔵省職員で当時は東京府庁に出向中）が、「それでは上里町でいただきましょう」ということで交渉して譲り受け、金窪神社にはめ込んだということだ。

金窪神社を出て350メートルほど進むと民家の角に消火栓ボックスと並んで「三国道入口」の石柱が建っている。

ここは、中山道から分かれ、烏川を渡って角淵（群馬県玉村町）へ向かう三国街道の分岐点。

中山道新町宿が成立するまでは、ここを右折する道が上州、越後に向かう主要道路であった。

この石柱のすぐ先、左側が陽雲寺の入口だ。



陽雲寺

元久2年(1205年)の創建と伝えられる曹洞宗の寺。はじめ満願寺と称した。

徳川家康が関東に入府した際、武田信玄の甥である川窪信俊がこの地に配置され、信玄夫人（陽雲院）を境内に住ませたとされており、没後その菩提を弔うため陽雲寺と改称した。



武田信玄夫妻のものと伝えられる画像など武田家関連の資料が残されている。

信玄夫人は京都の三条家の出身であることから、明治時代には、武田家末裔の宮司武田正樹と政府の要人三条実美との通信の記録も残されている。

また、新田義貞の家臣で金窪城主であった畑時能の墓もある。

陽雲寺の石の大門を出て西に向かう。

60メートルほど進むと畑時能の首塚と伝えられる愛宕塚がある。

この先の道を右折し、少し中山道から離れるが、金久保村の名主を代々勤めた須賀家に立ち寄ってみる。

須賀家



中山道から 700 メートルほど入った西金公会堂の先、立派な長屋門のある家が須賀家だ。

須賀家は 18 世紀中頃から金久保村の名主を代々勤めた家で、嘉永 2 年（1849 年）には小作人が 21 人いたという記録が残っている。

また、烏川の藤ノ木河岸を通して、藍玉、大豆、蚕種などを取引し、質屋金融も行ってた。

江戸の物価情報を絶えず入手しており、江戸の商人から送られてきた「米、麦、大豆などの品目と値段が刷られている書状」や「大豆の値段が急騰したのでたくさん送ってほしい旨の書状」が残されている。



この辺りには昔ながらの立派な家や蔵が今でも残っている

ちょっと一息



当主の須賀正昭さんに話を伺った。

「私で 17 代目。祖父は賀美村の村長、父は上里村議会議員だった」
それにしても長屋門も母屋も立派だ。敷地も相当広かったらしい。

「この家は明治の初めころに建てたもの。サッシ、トイレ、お風呂以外は手を入れていない。昔は養蚕をやっていて高窓も 4 つあったが、台風などの時に危険なので外した」と語ってくれた。

中山道に戻る。西に向かって 650 メートルほど進むと、国道 17 号と合流するちょっと手前の右側に高窓のある家が目に入る。

高窓の家と勝場庚申塔群

なかなか歴史があり
りそうな家である。

中山道から一步入
れば今でも高窓のあ
る家を見ることがで
きるが、中山道沿い
では唯一ではないか。

奥には蔵もある。



この家の東側には二十二夜様 1 基と庚申
塔 3 基が並んでいる。

庚申塔群の前の坂は「庚申坂」と呼ばれ
ているらしい。



一里塚碑と天王社

高窓の家のすぐ西側に一里塚
跡がある。

江戸時代、距離の目安として
整備された一里塚は、一里ごと
に 5 間 4 方の塚を築き、頂上
に榎を植えたもので、ここは
日本橋から 23 番目の一里塚
だった。

その跡地には「天王社」が祭
られている。



一里塚跡から進むとすぐに国道 17 号と合流する。「勅使河原（北）」交差点だ。

さらに 150 メートルほど進むと「神流川橋（南）」交差点に差しかかる。

「大光寺」という案内板に沿ってこの交差点を左折し、250 メートルほど行くと大光寺に到着する。

大光寺

臨済宗円覚寺派の寺で、健保3年（1215年）に武蔵七党の勅使河原権三郎有直が創建。勧請開山は、日本へ初めて禅宗を伝えた栄西禅師である。

天正10年（1582年）の神流川の合戦により総門のみを残して焼失。

また、寛永8年（1631年）には神流川の大洪水で境内が水中に沈んだ。



さらに、明治42年（1909年）には、高崎線の列車の煙火により引火して総門、土蔵を残し全焼したため、本堂等を再建し現在に至っている。

神流川渡し場のたもと（本庄宿側）に建立された常夜灯（見透燈籠）が保存されている。



神流川の両岸には、旅人の便のために常夜灯が設けられていた。

本庄宿側の常夜灯は戸谷半兵衛が文化12年（1815年）に建立したもので、夜に火を灯すと両岸がよく見透せたので「見透燈籠」と呼ばれていた。

文政5年（1822年）に洪水で流出し、そのままになっていたが、安政4年（1857年）の大雨がこれを砂中より洗い出し、勅使河原村の人達によって掘り出され、大光寺に再興された。

ところで、新町宿側の燈籠建立にはこんな話がある。

文化7年（1810年）5月、俳人の小林一茶が新町宿の旅籠に泊まったところ、夜更けに突然起こされた。提灯を持った者が「神流川に燈籠を建て川渡りの助けにしたいから寄付を」とのこと。一茶は懐がさびしかったので免除を願ったが承知されず、結局12文を寄進したという。寝込みを襲って寄付を強要するというのもすごい……。

なお、新町宿側の燈籠は高崎市の諏訪神社に移築されている。

勝場百庚申塚

大光寺を出て中山道に戻る。

高崎線の下をくぐり、北に向かって進んでいると右側に小山が見え、そこに庚申塔らしきものがたくさん建っている。勝場百庚申塚だ。

西暦では60の倍数が庚申の年であり、この塚は庚申の年である万延元年（1860年）に地元の人によって造られた。

その後、大正9年（1920年）にも庚申塔が造られ、合わせて祭られている。

130余基あり、上里町内最大の庚申塚である。



近くに住む今田長一さんによると、「あちこち傷んできているので地域の皆で直そうという話をしているが、なかなか……。とりあえず、年に3回くらい交代で塚をきれいにしている」ということだ。

「春になるときれいな桜が咲くので、それを電車で見た人がわざわざ降りて見に来ることもある」と話してくれた。

中山道に戻る。「神流川橋（南）」交差点を左折するとすぐに神流川橋だ。

神流川の渡し場跡

神流川の渡しは本庄宿と新町宿の間の渡し場である。溪斎英泉の浮世絵「本庄宿神流川渡場」（本書表紙）にその様子を見ることができる。

当初は勅使河原村が川越人足を出し賃銭を取って渡していたが、安永3年（1774年）新町宿が土橋を架けて賃銭を取ることを願い出たことから、翌年には勅使河原村も同様の願いを出し、長い争議となった。

そこで、安永6年（1777年）に戸谷半兵衛が仲介に入る。

半兵衛は今後の土橋修繕費に充てる名目で100両上納することを申し出、その代り無賃渡しとする願いを道中奉行に提出した。

天明元年（1781年）には自費で長さ30間、幅2間の土橋を架け、渡船1艘による無賃渡しがここに始まった。



神流川橋から群馬方向を望む



神流川古戦場跡

本能寺の変で織田信長が自刃したことが伝わると、それまで信長に恭順していた北条氏が反旗を翻した。

そして、天正 10 年（1582 年）6 月 18 日から 19 日にかけて、信長の家臣として上州と信州の一部を治めていた滝川一益と北条氏直・氏邦が神流川を挟んで対陣した。世にいう神流川の合戦である。

当初は滝川勢が優勢だったが、翌日には兵力に勝る北条勢が押し切った。この合戦は、戦死者が両軍合わせて 4 千余人を数え、戦国時代関東における最大の激戦と言われている。

また、この時の兵火で上里町にあった寺院の多くが焼失し、大光寺の山門のみが残ったと伝えられている。

上里町側の堤防上に説明板があり、橋を渡った新町側に神流川古戦場の碑が建っている。



中山道は、神流川に架かる国道 17 号の神流川橋を渡り、新町宿（群馬県）へと入っていく・・・

本書を執筆するに当たり、以下の文献を参考にさせていただきました。

主要参考文献

- 本庄市発行『本庄市史』
- 上里町発行『上里町史』
- 柴崎起三雄著『本庄のむかし』『本庄のむかし こぼれ話』

中山道最大の宿『本庄宿』の再発見

中山道街並み調査班

- 企画・監修 石川 勉
- 発行スタッフ 田沼 孝夫 石坂 健
設楽 大輔 新里 清恵
- 挿絵 風間由香梨

埼玉県北部地域振興センター本庄事務所

〒367-0026

埼玉県本庄市朝日町 1-4-6

TEL 0495-24-1110

2017年2月発行（その壱）、3月発行（その弐）

2017年11月改訂（その壱・その弐合体版）

※本書で使用している地図（3頁、5頁、11頁、19頁、31頁、47頁、63頁、69頁、73頁、81頁）は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の電子地形図（タイル）を複製したものです。

（承認番号 平28情複第1079号）



飯塚能成 作「蔵の街」



埼玉県マスコット「コバトン」 & 「さいたまっち」